

338-31

51

學  
第  
架

清  
印

曲夜と影幻

序、遙 遣 内 坪  
著 雀 雨 田 秋

四  
林  
聖  
收  
藏

四  
林  
聖  
收  
藏

338-81



夜曲

秋田雨雀



序

新しき人雨雀君は作られたる新しき人にあらずして生れたる新しき人なり。君が作の批判家、君が脚本の演者、共にまた新しき人ならざるべからず。君の批判家は今や其人に乏しからず、君の演者は未だ之れあるを聞かず。思ふに新しき演者の場に上りて君が作に多少の功を収むるの日こそ全く新しき劇の成り出づるの日ならん。君にして若し新しき演者の多く速かに得らるまじきを考へ、其作をして更に一段

簡單ならしめ、其人物の數をして更にはるかに  
寡少ならしめなば、其功を收むるの日更に幾段  
か速かならん。

我が陳き劇に倦憊して新たに沙翁劇を  
上場せしめんとする五月中旬

逍遙

青葉はまた私の奮闘をつむ時が来た。私はあの永い梅雨の來ない  
内にこの小さな仕事を終へてしまひたいと幾らあせつたか知れな  
い。

この短い縁の世界の中で坪内先生の文藝協會や先輩小山内君の自由  
劇場が開れるのだ。私は淺草の先生にも暫く逢はなかつた。この小  
さな本でも出來たら、これを持ってお詫びに行かうと思つてゐる。

五月中旬

憂鬱な森の窓から

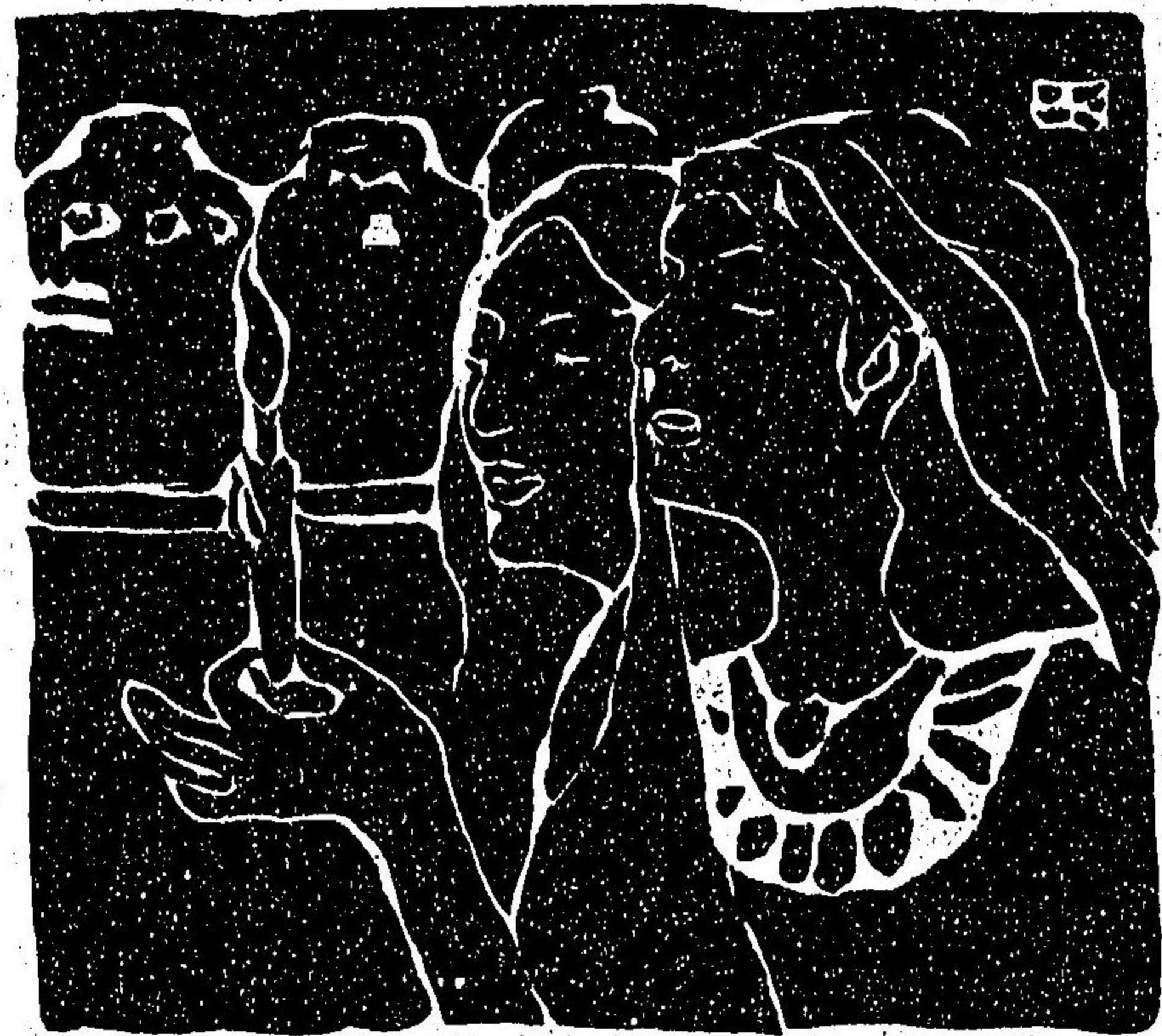
— 雨 雀 生 —

「影と夜曲」の意匠はすべて木間國雄君がやつて呉れた。吾儘な作  
者の注文に應じて幾度も稿を更へて呉れた木間君の友情に對して感  
謝の意を表したいと思ふ。

幻影と夜曲目次

戯曲

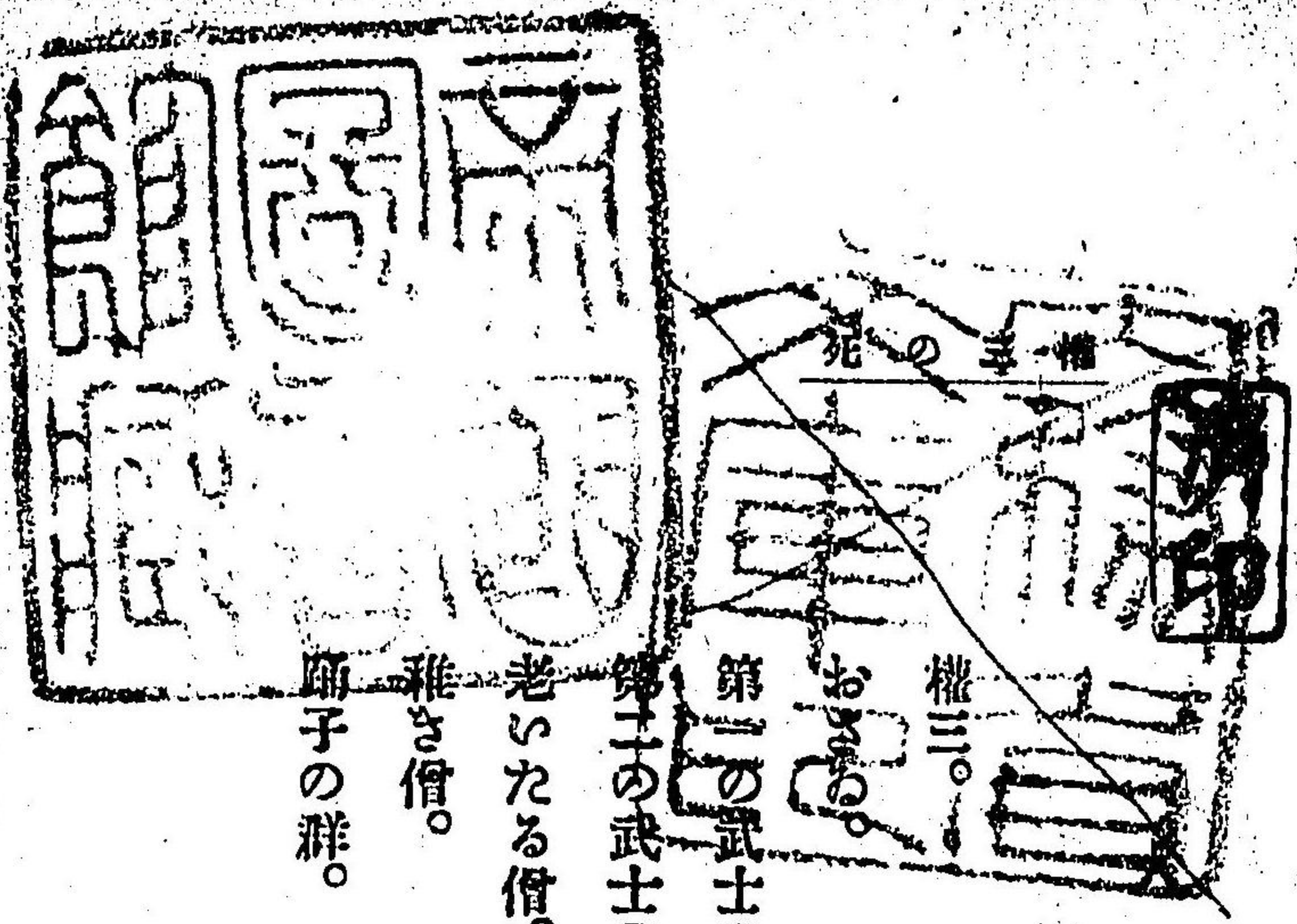
○ 権三の死	1
○ 紀念會前夜	26
○ 第一の曉	66
○ 森林と犠牲	79
○ 市のイホメット	117
小説	
○ 少年とピストル	153
○ 乳	174
○ おそのと貞吉	187
○ 最初の宿	205
○ 二人の世界	213



編 五 曲 戲

権三の死  
の紀念會の前夜  
第一の晩  
の森林と犠牲  
市のマホメット

権三の死



物

青年、小姓。  
権三と共に歩む女。

師匠。  
學匠。  
大勢。



場所

大阪に近いある河畔。

時

一七二七年(享保二年)七月十七日午後六時頃

曲花と影幻

第一節

舞臺左手に老いたる銀杏樹、其影が舞臺全面を覆いつくす。右に立つる。銀杏樹の灰白色。

皮膚の陰に赤い小さな御堂かのぞく。右手銀杏樹と對立した位置に長い、や、廣い橋の袂が緑色の柳の叢につままれてゐる。

橋際から左手に斜めに走る河には帆と帆柱の時々靜かに動く。土堤はやち高く築かれて、其上に並に柳が生へ、其縁を通して廣い内海の空が見える。橋の音。不明確な盆唄の合唱。單調な鼓の音。太陽は黄昏の偏光な河の對岸に投げた。

老いたる僧。(土堤の上に「稚き僧」と腰かけ、河の面を眺めてゐる。顔の半面のみを見せる。年輩不明、黒衣、笠と杖を手に持つ。)

おれの僧衣が濡れてゐるわ。お前の僧衣も濡れてゐるぢやうな。冷い河風が吹いて来る。(稚い僧を見る。風は南ぢやな。大阪へ行く船には芝居見物の女子供が、船の方へ出て扇をはげしく動かしてゐる。扇の模様が見えぬので、たい浮標うきぶしの上に乗らしてゐる鷗のやうに見えるわ。

稚き僧。御覽なされ、踊子に犬が吠えてゐます。踊子が逃げて行きます。そして犬が吠えるのをやめると、また踊ります。

老いたる僧。(稚き僧を見ずに)おれは長い旅をした、おれはおれの生涯の中に十度

死の三権

の河を渡つた。十五度あの湖の周圍を歩いた。おれはお前の生れぬ先からこの國を旅をして歩た。

稚き僧。(河を見下しながら)この河の水は、でも、あの湖のやうに澄んでゐません。

あの湖の中には色々な魚が住んでゐると山の人々が申して居ました。(首を無邪氣に曲げて老僧を見る)和尚さま、この河にも澤山の魚が居るのでせうか？

老いたる僧。うむ、澤山の魚がこの濁つた水を楽しんでゐるわ。あの湖の中では見られぬほど大きな魚が、またそれほど澤山な魚が泳いでゐるわ。

稚き僧。では(疑はしげに)和尚さま、私の父が漁師だとある人のいふて居るのを聞きましたが、それはほんとで御座りませうか？

老いたる僧。然うかも知れぬわ。お前は腐つた魚の臭氣におひのする舟の中に眠つてゐた。

漁師の息子と人の云ふのは嘘ではなからう。ちやうど小さな目高魚めたかぎのやうな口をしてゐた。でもな、お前は舟の中で吸つた呼吸より舟の外で吸つた呼吸の方が多いのだ。それでも、この國の人々は歴史を重んずるから左様なことをいふのぢや。何で

おなごことだ。

稚き僧。いえ、私も何とも思ひはいたしません。

老いたる僧。踊子どもは日の蔭るのも知らぬやうに樂しげに、歌つたり跳ねたりしてゐる。(立ちあがり少し歩みながら)お、おれを見たか、あの船は伊勢へゆくのぢや

伊勢の港へゆくのぢや。

稚き僧。伊勢へ河にしのゆくのせう。

老いたる僧。(答へずに、河の面に目を送り)船の中の女は青い首を出して踊子の方をうらめしげに見て居る。船頭は茶の箱の間に女供をつみ込んで歌をうたひながら、

楫を荒々しく動してゐる。

稚き僧。河をのぼる船の女は、おれを見て笑つて居ります、ちやうど京の街みやこの唐操からまわしを見るやうに。

老いたる僧。あの女供は、伊勢へ行く女を見たおなじ目で會根崎の心中を見るのぢや、そして涙を流すのぢや。涙を流す眞似をするのぢや。

稚き僧。女供は伊勢へ何にしにゆくのせう。  
 老いたる僧。伊勢の港の青年供は、毎夜毎夜灯燈の下に集るわ。二階からは白い首が  
 覗くのだ。お前は伊勢の青年供は歌が上手だといふことを忘すれたの！  
 稚き僧。能う存じて居ります。港の角々には赤い湯屋の旗が樹つて居ります。湯屋の  
 小店に大勢の青年が立つて居りました、そして細い聲で歌つて居りました。私は、  
 その時和尚さまは、道行く夫婦の巡禮を湖のはざりて逢つた商人の夫婦とよう似て  
 居ると言はれたことも能う存じて居ります。  
 老いたる僧。然ぢやつたのう。おれも長い間旅をしてゐるが、あの様に似た人々は見  
 たことがないわ。あの人達が湖のはざりてしをつた物語は竹本座の芝居よりは面白か  
 った。あの人達は影のやうに世の中を這ひめぐつてゐるのだ。  
 稚き僧。私は今朝方北の橋詰に躰居んでゐました、其時そこを通つた武士の夫婦かと  
 さいました。そして其武士の夫婦は湖のはざりて逢つた商人の夫婦にも、また伊勢  
 の港で見た巡禮の夫婦にも、よう似て居りました。

老いたる僧。うむ。あの人達の影は歴氣樓のやうに私達に附きまとうて歩いてゐる。  
 として其人達はお前を見はせなんだか？  
 稚き僧。あの男の目は美しうございましてたけれど、いつでも遠いところを見てゐる  
 いて居ます。女の方は地面をぢつと見つめて歩いて居ます。二人とも地獄から来た  
 人のやうにふらくして歩いてゐます。そして時々街の四辻に立ち止つて怖しげに  
 四方を見廻はしてゐます。犬に追はれる乞食のやうに顛へてゐました。  
 (愈に河の方へ目を投げ、叫ぶ)  
 お、あれ、あれ彼處の河岸から船に乗らうとして居るのが彼の人達ではありません  
 か？女の方がまるであの人の姉のやうに、荷物の事に就いて船頭と話しあうて居り  
 ます。女が男の手を引いて飛び乗りました。(二人は暫く黙して其方を眺めてゐる。)  
 あれ、あれ、何うしたのございませう。女は男の手を引いて船から出ました。船  
 頭は何か罵しつてゐます。男はおどくして四角な白い金を船の中へ投げました。  
 船頭は二人の悪口を言つてゐます。扇を持つ男が、編笠の男となにか、しめし合は

せて大刀かたなに手をかけました。扇を持つ男が船頭をうちます。船は對岸に着けられました。二人の男が岸に登りました。笠の男は何處となく沈んでゐますのに扇の男は見世物小屋に入る小供のやうに小跳してゐます。

老いたる僧。(太く嘆息して)踊子の群は何にも知らずに踊つてゐるわ。あいらは夕餉もせずに『子の刻』まで踊り通さうとさふのぢやうらう。

稚き僧。和尚さま、私の袋には米が一杯になりました。何時なんときに私達は山へ登るのでせう。はや何時でございませうらう。

老いたる僧。お前はもう空腹くわんぷのか！酉の刻には間もなからう。

第二節

老いたる僧。橋の上に人がゐるやうぢや、踊子の相手が出来たのぢやな、踊子が連つれを

見付けさえすれば、いつも、輪を破つて離れるのぢや。さうなると、あとの踊が何うなうとこまひはしなすのぢや。

若き女。離しておくんなあれ！(姿が見えずに)

稚き僧。何故踊子が連れを求めるのでせうか。

老いたる僧。連れがあれば二人で踊れるからぢや。そして歌へるからぢや。

若き女。帯が解けるな！

稚き僧。たゞ二人ばかりで淋しくはないでせうか。

老いたる僧。「淋し」といふやうな言葉はあいらにはもうなくなるのぢや。

若き女。……(間を置いて)人を馬鹿にしなはんな。妾めかけにはちやんとした主が……

若き男。……舟……舟……舟

(時々鈍い太い聲。)

若き女。舟は破れても、金はんは門司の港へ着いたらふて来やはりました。

若き男。金はんはいゝ人やな、……

若き女。離れておくんなあれ、お前はんの手はほんまに鐵のやうやな。

若き男。……まあま、そならに言やはらんぞら、ぢやあへんか！……こならな手でも可愛いらふて呉れはるら、人もおますなわ……

若き女。……結句その方がいゝがな……あたいは知らぬよつて、ちやつと行きなはれ。

若き男。それではな、あたいがお前の代りに飛脚屋へ行つて来るよつて、お前はこゝに待つてゐなはれ、な、それがいゝな。(橋の袂に、柳の蔭に白き頬冠が見える。)  
若き女。いらんなあ、……もう直き酉の刻や、……何うでも離れておくんなあんなら、腕を噛み切るまねわ！

若き男。(突然)いた〜！

若き女。(やゝ亂れる姿にて舞臺にいで、銀杏の樹の前に立ち止る。袖を目に當て暫く泣き。やゝあつて躰居いて合掌する。稚き僧のみ首を廻して女の舉動を熱視する。)

(遠く幽かにリズムをなして聞える鼓頭。持の音。女は靜かに立ちあがり橋を反對の方に立ち去る。)

第一の武士の聲。(橋の上にて姿は見えずに)何物ぢや！

若き男。(沈黙)

第二の武士の聲。柳の蔭に居るものは誰れぢや！

若き男。(顫へながら)わたいであります。土地のもので。

第一の武士の聲。土地のものが何故、さやうなところになるのぢや。

若き男。柳の枝が欲しいよつて。

第一の武士の聲。(やゝ靜かに)柳の枝を何にするのぢや。

若き男。女をなぐらうと思ふよつて。尻脛の鳩を打たうと思ふよつて。

第一の武士の聲。よし、行け。

第二の武士の聲。甚平殿、港町へ行くものは大抵この橋を渡るか、其男に聞いて御覽なされ。なるだけ物々しく問はぬがよろこばいませう。

第一の武士の聲。こら〜、一寸と待つて呉れい！

若き男。(驚いたやうな聲)なんであります。

第一の武士の聲。港町へ行く者は皆なこの橋を渡つて行くか？

第二の武士の聲。私達は港町へ宿をとらうと思つてゐるのぢや。

若き男。さやうでおます。皆なこの橋を渡つて行きます。

第二の武士の聲。よし、よく解つた。有難ふ。

第一の武士の聲。もうよし、静かに行け。

(若き男の草履の音遠くなる。)

第二の武士の聲。(静に言ふ)甚平殿、今夜は何故だか、私の手が震へてならない。私は久しぶの間大刀を手にしないので、大刀が大變に重くなつたやうな気がする。

第一の武士の聲。市之進殿、私達のこれまでの艱難辛苦を思つても御覽なされい。今夜こそ私達の家族に耻を塗つたものを打つ時ではありませんか、私の腕が鳴つてゐます。

第二の武士の聲。私だとしても、貞操を重んずることがこの國の女の最も大きな敵、それを破るものは敵として見ることは知つてゐます。そんなものは魔のついた密柑の

やうに捨ててしまはねばならぬといふことも知つてゐます。然うするのが武士の義務でせう。(間)けれども密柑を捨てるに銀の箸を要せぬではありませんか！氏素姓も知れぬ小性つれと病身の女を切捨てるには私の大刀が重過ぎます。

第一の武士の聲。もう、お止めなされえ。家族の耻を雪ぎ、悪を懲るのが武士の義務とは思ひませんか？さやうな心持なればこそ妹一人を善生にしてしまいました。

第二の武士の聲。(太く静かに嘆息して)もう、いたし方がありません。私も心を決めて大刀を抜きませう。

第一の武士の聲。無論の事です。

第二の武士の聲。然し私は日の暮を待つて討ちたいと思ひます。私は彼女の顔を見ては大刀が抜けますまい女の子は彼女によく似てゐます。私は彼女の顔と女の子の顔と見分けが付かぬやうになりました。

第一の武士の聲。それでは、其事丈けはお任せします。私達は静かに港町の方を歩いて居りませう、さあ参りませう。

第二の武士の聲。(静に)参りませう。

(聲脈の音遠くなる)  
銀杏の葉は軽く散る。

第三節

稚き僧。踊子の群が四五人港町の方から橋の方へ歩いて来るやうだ。皆な腰に團扇を  
さして、赤い袖を目に當てゝゐます。皆な何か話しあひながら、お葬式の列のやう  
に。

老いたる僧。(依然として河の方を見ながら)潮が段々上げて来よるわ。あの踊子はあ  
の鷗の飛んだあたりから来たやうぢやが。あそこには別な新しい塊が出来てゐる。  
依然よりはもつと大きくなつたやうに見えるわ。

稚き僧。真中に入つた男は妙な顔付をして歌ふではありませんか、周囲の女達は團扇

をあげて男を煽いでゐます。男は一層聲を張りあげて歌ひます。顔を赤くして頬を  
膨張させてゐます。(間。)ほんに和尚さまの仰有る通り、河水がひどろ殖えて参りま  
した。「白玉」を賣る店の軒灯燈の赤い文字が火を燈さずに河水に映つて居ります。  
踊子は「白玉」の屋臺を動すので店の主婦さんが怒つてゐます。(盆唄が時々烈しくな  
る。二人は黙して眺め入る。)

盆唄。(遠く、唄は房州邊の盆唄に類似のもの。)

来いといはれて。

其行く夜さは、

足のかかるや、

うれしきや。

○

物を挽きやこそ、

お手にも障れ、

挽かな見るばかり、

ホニニ思うばかり。

○

しんさんさるる、

眠る眼もいとし、

こりなげなこけ。  
(唄の間に男女の言ひ合ふ聲。笑ふ聲遠く響く。稚き情のみ好奇心に刺激されたやうに頭を廻して左右を顧る。)

踊子の群。(二人づゝ手を組み合ひ、悲しげに橋の方より舞臺へ出る。市松の華美な染模様のある揃の浴衣、タボの長く後に突き出た裾。メランコリイな姿の内にも何處にか放逸な時代が流れてゐる。)

第一の踊子。お仙はん何處へ行きやはつたか？

第二の踊子。飛脚屋へ行って見まはるか？

第三の踊子。(舞臺の中頃に立ち)はんまに、それがようおまかせや。お仙はんはあのやうに氣の細い女やに、ひよつとして間違ならんとも解りやへんよつては。

第一の踊子。(第三の踊子を顧みて)去年は金はんもよう踊りやはつた……わたいは悲しうて、ともならぬな。(袖口を目に當てる。)

第四の踊子。それに、わたしは、金はんとは幼馴染やよつて、あの人の癖までよう覚えてまんね。わたしはお仙はんの胸の中を察すると悲しうおますわ。

第二の踊子。門司に近う、日本一の灘やと。

第一の踊子。あの南の橋端の飛脚屋には船頭がたんとゐるといふことや。その内の一人の男が金はんの友達やと言やはるさうな。

第三の踊子。わたしは金はんが失くなつたその海が憎ふおます。お仙はんは、はんまに何うしてゐやはるや。

第一の踊子。お仙はんの遅いのが氣になるな。

第三の踊子。それでは急いで行さまよか。

第二の踊子。さあ。(歩む。)

第四の踊子。さあ。(歩む。)

(四人は小走りに左手に行く草履の音遠くなる。)

第四節



老いたる僧。山の人はいもう夕飼の席に就いたであらうのう。お前はひどう空腹さうな顔をしてゐる。それでもおれ達は月の落ちぬ先に山へ登れると思ふよ。

稚き僧。今夜は何となく常の日は異ふやうに思はれます。けれども和尚さま、私は少しも空腹いとは思ひません、見たり聞たりする事が餘り多いので。

老いたる僧。然うぢや、幼い時は得てさやうな事があるものぢや。そしてお前は恐しく震へてゐるやうぢや、寒くはないか？

稚き僧。寒くは御座いません、僧衣の下に襦袢を着て居りますので、河風もよう通しません。

老いたる僧。それでは、何故さやうに震へるのぢや。  
稚き僧。何故だか、たゞ震へるのでございませぬ。

老いたる僧。うむそれではこの銀杏の陰影がお前の身體に悪Sのぢや。(間を置き)おれ達は酉の刻には山の門を入らねばならぬのだ。あの門の金網の面には赤い布、青い布が澤山に結んでゐるわ。山の人達はあれに手をつけぬやうにせいとお前に言ひ

居つたのう。

稚き僧。何故あのやうに申したので御座いませう？

老いたる僧。人の運命には他人が手を觸れぬものぢや。

稚き僧。さやうな意味で言ふたので御座いませうか？

老いたる僧。たゞ、其ればかりではない。そのやうにするのが、山の人達の生業なのぢや。そしてあの布を結ぶ人々はその中に秘密が包まれてゐると思へばいゝのぢや。

稚き僧。そしてあの人達は、山門を入らずに山に登るやうに申しました。

老いたる僧。おれ達は念佛をまうさぬからぢや。山の人達は念佛を誦の唄と思ひ居るからぢや。

稚き僧。蹄子の群が船庫の蔭に隠れて行きます。それでも聲ばかりは、却つて高かくなりました。

(二人は黙して河の面に目を投げる。やゝあつて稚き僧のみ左右を見廻す。唄の聲再び遠く響く。)

権三。(二十四五才の青年。憔悴したる神経質な表情。物を怖るゝやうな舉動、髪のはづれがやや蒼白い頬に流れてゐる。左の手に編笠を持つ。ちじみ立島の着物、大脇指、紫ちりめんの帯、草鞋がけの旅姿。鋭い響のある音。)

私達は日の暮れぬ内に宿をとらなければならぬ。(左手を顧みながら出城) お前はさういふ所に立つて何をしてゐるのだ。お前の目は糸のきれた人形の目のやうに、ざつと一つとところを見てゐる。お前の足は宙に吊されてゐるやうだ。

おさむ。(三十六七才。武士の妻らしき装ひ、下白かたびら、上着かうりんの墨繪の梅の立木、さゝやう入、帯花りんず、白ちりめんのかゝえ帯、べつここの丸ぐし、紫ぼうし。面長、色白、目細くヒステリー性の女。力のない歩き方。)

おさむ。(銀杏の幹に手を當て、男の方を見る) 私も幼い頃、但馬の國のある在所の身頼りの家に居た時が御在いました。その時は母方の人達は、男も女も揃手拭に揃の浴衣で踊りました。私にも踊れと申しましたので、私は子供ながらに人々の中に紛れ込んで踊つたことがございました。それが丁度故郷の女の娘と同じ年の十三の折

だと思ひます。

権三。(自然な態度を以て、女を見ながら) 何うかそのやうな過ぎ去つたことは言はな  
いでもらひませう、私は市之進殿の大刀の胸に觸れるより、お前の口から洩れて來  
る追憶の言葉がもつと痛いのだ。

おさむ。(聞えぬやうに) あの飛脚屋の前で泣いてゐた女の顔が、娘によく似て居りま  
す。(首を曲げて河の面を見ながら) あゝして樂しげに歌つたり踊つたりしてゐる娘  
があるかと思ふと、またあゝして泣いてゐる娘もある。私も娘の親だと思へば……  
(すゝり泣く)

権三。(初めは静かに目を閉ぢ、やがて反抗的に自然に歩む。)

おさむ。私は斯うして旅をして歩いてゐても、時々思ひ出すのが娘の顔です。男の子  
供等は御祖父さんによく馴染んでゐますから少しも心配は致しませんけれども、た  
い氣配りは娘の身の上で御座います。

権三。(内海の上を行く夕雲を見て、獨語のやうに) あゝ、己れも子供の頃から長い間

色々な國を漂泊ひ歩いた。身體は健えても心は何時でも楽しかった。行く先ぎの町の燈火は己れの爲めに笑つて呉れた。

おさる。(ヒステリカルに)湖の邊で見た夢の中の娘の顔！(手を舉げて、ものを握むやうな舉動)「お母さん」とも何とも言はず私の顔をぢつと見てゐた。お、あの目、あの目！

權三。(女を慰めるやうに、傍に寄り添ひ、氣を沈めて呉れい……氣を！お前の目は何處を見てゐるのだ。私の顔が見えないのか、權三の腕は細いけれども一人の武士には耻ぢぬだけの力を持つてゐると言つたではないか！鎧の權三と人に歌はれた男……運命の前に頭を下げる位ならば……道德の繩にしばられる位ならば斯んな旅はせぬ筈だ。さ、其手をもつて、己れの手を握つて呉れい。(女は靜に頷を舉げて、權三の顔を見る。二人は涙に目をしばたつく。)

おさる。お、權三様、私は嬉しう御座います、天にも地にもたゞ二人の權三様、ヒステリ性の笑ひを洩し、權三の手をとり顔をあてる。權三は却つて泣く。)

權三。(涙を拂ひ、顔をあげて)あ、あの歌の聲をお聞き。あ、いふ華やかな世界があるのだ。私達の世界は新たに開けるのだ。『畜生は畜生の世界に楽しんで生きてゐる』とお前が言つた。お、其世界を私達は探してゐるのぢやないか。……だがその世界は何處にあるのだ？

おさる。『二人の胸の中にある』とあなたは、お仰有つたではありませんか。

權三。だが其胸は破れてはゐはしないか、そして私達は怖しい運命の前に立つてゐるのではないか？

おさる。私も何となくこの胸が空虚になつたやうに思はれてなりませぬ(胸に手を當てる)私はあの女の子を産んだ時にも、恰度このやうな心持が致しました。

(黄昏は河と其一體の後景をつむ。)

權三。私達は長い間睡眠を求めて睡眠を得ななつた。(靜に橋の方へ進む。)

おさる。あの船は大阪へ行く船でせう。今夜こそは安心して眠れませう。(少し離れて橋の方へ進む。)

(橋を踏む二人の足音次第に遠くなる。極めて唐突に、男の叫ぶ聲と女の悲鳴。烈しい鐵と鐵と打ち合ふ音。走る音、大刀の橋板を切る音、人の倒れる音。)

船の中からの聲。血だ、血だ、橋の上に人殺があるわ！ 血が雨のやうに降るわ。(土手の上から見える船の帆、又は帆柱など急に動き出す。)

稚き僧。(無意識に橋の方へ歩み)橋の上には、殺された人が倒れてゐます。そして一人の武士が大刀を女の咽喉にあてゝゐます。そして、も一人の武士は血に染んだ大刀を下げて左の手を目に當てゝゐます。

老いたる僧。酉の刻が來たと見えて潮が充ちてしまつた。おれ達の山へ行く時刻が來たのだ。

(老いたる僧、笠と杖を手に持つ)

稚き僧。(老いたる僧の傍に行き、懇願するやうに)何うして私には解りません。私には解りません！

老いたる僧。(前と同じ調子。)人の結んだ布は解かぬがいのぢや。

船の中よりの聲。血だ血だ……。

(舞臺全く暗くなる時幕を下す。)

(一九二〇、九、三)

# 紀念會前夜

夜前會念紀

## 場所

東京——或る高臺の一部、女學校々舎前の街路。

## 人物

男——女學校小使二名。 /

北陽舎牛乳配達夫三名。  
通行人數名。

女——校友山田富子。

學生。世野田愛子、畑操子、垂井陽子、森花子、其他大勢。

## 時

現代、秋、晴れた夜から晴れた朝まで。

正面右手寄りにゴシック式赤煉瓦の圖書室、科學室、科學室、樞木の斑な繁みより見える。窓を通じて青色強烈な光の光。左手道を隔て、寮舎の一部。各の戸は固く戸締りして居る。  
午後十時過ぎ、折々不明の通行人。黙して靜に通る。  
車の音して配達夫甲乙登場。甲三十歳位、乙二十七八歳、双方共北陽舎の印袷天を着てゐる。

甲。さやに寒いな。

乙。寒さひとお天氣でさや。

甲。お天氣だつて遊ねらからつまらねえ。

乙。でもお天気だとお前助かるせ(間)峯さん何うした？ 遅れやしねいか！

甲。(振返つて車から顔を出すやうにする)おや、大將また居眠りして歩いて居るんだな——車の音がしやしねいか？

乙。何だか此中でぶうぶう鳴らしやがるんで聞えやしねら。

甲。ピアノの音だよ(校舎の方を覗くやうにする)今日は何かあるんだ。

乙。む。峯公何うしたんだらう。

甲。燈灯が見えやしねいか(車を止める)

乙。色々な物が光つてるよ。何れが峯公の燈灯だか別らねい。銀さん見て見な！

ピアノなんか聞いたつて解りやしねいか。

甲。峯公厄介な奴だな——なる程燈火が餘り澤山あつて、何れがなんだか別らねい。

乙。峯公の燈灯は動いてるよ。

甲。何の燈灯だつて皆な動いてらあね。

乙。外なお眞直ぐに来る、峯公の車は居眠りして歩くから横に動かあね。

甲。また鳴しやる！ 癪だな。一服やらうかえらう。

(甲乙二人は車を樫木の根本に下して煙草を飲む其間校舎内では緩やかな眠いやうなピアノの音が止むと鋭い大勢の樂聲、ついでに陽氣なマイナ。)

乙。(立ち舉り街路に出て)銀さん、来たよ。燈灯が來ねいで人が來た。

甲。車の音がしねいか？

乙。やつぱりぶうぶうと些とも聞えやしねら。

甲。ぶうぶうとやなくてお前の耳が悪いのだ。

乙。車ぢやねいやうだ。牛乳屋の角で止まつた。一人はパン屋の横へ入つたやうだ。

甲。パン屋の主人だらう。

乙。牛乳屋の息子だらう。

甲。何故？

乙。あの息子は能く遊びに出るから。

甲。泰さんか？

乙。弟の道雄さんの方だ。新宿で己ら一所になつた事がある。

甲。そして、おごられたらう。

乙。何におごるもんか、己ら時計を貸してやつた。

甲。そして返へしたか？

乙。返へした、そして歸りに車にのせてもらつた。道雄さんは其晩女郎の所へ宿つた。

道雄さんの相方は其れやお前いゝ女だぜ

甲。じ、然うか——御前の車は大變坐が惡いな、己れの肩ん所へ押して來るやうだ——

そして誰れだへ新宿の女なら大抵知つてるよ。

乙。此處に大きな石塊があるんだもの、車はまるで石へ腰懸けて居るやうものだ。(立ち上りながら車を下し變へる)

甲。(吃驚して立ち上り)パン屋の息子ぢやねらや。二人で此方へ來た。また二人止りやがつた。

乙。巡査だらう。

甲。巡査なら劍の音がする。

乙。巡査ぢやねら。二人は此方を見てるやうだ。一人は、しがみやがつた。一人は逃げやうにして居る。

甲。(咳拂ひしながら煙管で石を打つ。)

乙。(車止を鳴らす。)

甲乙。來た〜。

(不明の通行人二人急に早足に通り過ぎる)

乙。(石に腰かけた儘)もし〜。

通行人甲。(少し頓えて)何んだ。

甲。貴方の來た方に牛乳の配達車は居ませんでしたか？

乙。車を引いてる男は爺さんで、腰の所へ赤い毛布の破片を捲いて居るんだ。

通行人乙。(影のやうに靜に言ふ)車は見ないが、男は居た。

乙。何處に居ました。

通行人乙。交番の中で巡査に叱られて居た。

何んでも會堂の前で寝て居たとか言つて。

甲。峯公またやられたな——此れでもう三度だ。何うもお蔭げさまで(と通行人に禮を言ふ。)銀さん行つて連れてお出でよ、可愛相に。

乙。己らいやだ(通行人逃げる様に闇の中に入る)銀さん行つてお出でよ。朝遅かつたから、己ら昨夜二時間しきや眠りやしねい。足がまるで棒になつてる。

甲。朝遅いたつて夕飯迄備を洗ひや澤山だ。肩が張て肩が張て仕方がねい。

乙。ぢや斯うしやう、くぢびきにしやう。

甲。む、よし。 (手を出して)何かあるか、反古か何かないかな?

乙。葉切でも拾はう、(立ち擧つて)葉切も落ちて居ねい、皆な冷たい石ばかりごろ／＼して居る。此處は新に敷きつめた所だ。

甲。葉が無ければ何んでいゝやね。氣がきかねいな。木の葉でも何んでもらゝ。長／＼のと短けいのと有りやゝんだね。

乙。木葉なら幾らも有らあ——だけでも皆んな物の奇麗に腐つて居やがる。

甲。眞實にぢれつていな——然う愚痴ぐちしてゐる内に峯公の奴来てしまふよ。何一つ仕出來した事のねい男だからな、(獨白ひっそりのやうに言ひながら自身立つて尋ね廻はる。)

乙。峯公が來さへしれやいゝぢやねいか、あんな頓馬な事言ひやがるんだ。(是れも獨白のやうに、眠さうに元の席に就く)

甲。峯公の奴にやほんとに凝り／＼してしまふ。

乙。無からう。

甲。つまらねえや。今から舍へ行くと平常ふだんよりや何うしても一時間餘遅れてゐるぜ。

乙。車の音がするやうだ峯公だ。

(配達夫丙、古い袴天に赤毛布の被片を捲きつけて靜に車を抱いて來る。五十五六歳。)

甲。來たな。やつぱり眠つて居やがる。

乙。歩いてるぢやねいか。

甲。眠りながら歩いてやがるんだ。



乙。呼ばうか？

甲。呼んでも駄目だ。

乙。峯さん〜。

乙。やつぱり平氣だ。車を押へりや止るよ。

甲。(車を押へながら)峯さん何うしたな！

丙。い、もう何時だ(眞面目に歩きながら問ふ)

乙。銀さんお出でよ。何時だとよ。

甲。ふ、何時だつて己ら誰だか知てるから。

乙。己ら一體誰れたら。

丙。(歩きかきながら)寝ぼけて居やがらあ。人を置き去りにして置いよ。

(由乙左方から丙の顔を覗く。)

甲。ハ、是れや飛んだ事になつちあつた。峯さん餘程何うかしてるよ。峯さん年老てるから何かしやしなにかと思つて大抵心配した事ぢやねえ。

乙。己らも年老つてるから心配してるんだつて。ハ、難有ていな。お蔭さまで交番へ連れてかれてよ。だけれどな己ら交番で蠟燭二本もちつて来た。

甲。蠟燭！

乙。(燈灯の中を覗いて見て)眞實だ。何うしてもらつたんだえ。

丙。何ね、散々叱り飛ばして置いて交番を出る時燈灯をつけて行けてんだ。

乙。だから己ら言つてやつた。だんなに叱られてる内に蠟燭が燈つてしまつてなら、もし強つてとなら。甚だ何んだけれども一本拜借したいものだ、それがいけなうとなると御邪魔で御座んしやうけれど此處を夜明迄拜借致したいと斯う出たんだ。

甲。龜の甲より年の功だ。

乙。もうほんとに運いよ(校舎の方を見る。)

學校のガスも段々に消えて行く。

(三人共に退場。)

小使甲。(乙と連立ち乍ら校門から出で誰れかを探し求むる様子)斯んな所に居る筈が

なからうし。

小使甲。畑さんの友達だつてな。畑さんはあんな氣さくな方なのに、困つた人間もあるもんだ。

小使甲。(燈灯を檜木の間を振りかざしながら)山田さん！ 山田さん！

小使乙。然んな事したつて駄だ。もう居ないんだよ。家へ歸へつたんだらうよ。

甲。先刻まで畑さんだの、垂井さんだのと幕の刺繍をして居たんだが、散歩に行つて來るつて雪駄をひつかけて出たさうなんだ。

乙。山田さんてのあ一體何れだ。晝から來てるお客の内だらう。あの顔の赤い方かへ、長い方かへ？

甲。長い方だ——是れや何うしても御嶽の方だよ、あの寮の方には御友達も居るし、自分も學校に御出の頃彼處が大變に氣に入つてたんだから。

乙。一寸變てる女だね。

甲。變つてるの段ぢやない。大變人だ。學校でも随分手餘したんだとよ。

(二人は校舎裏手の方へ廻る圖書室へは女學生等の笑聲起る)

畑操子。(紫の袴黄色のリボン、二十二三歳。垂井陽子、廿歳位、森花子十九歳位の先に立つて小走りに門を出て登壇。)花子さん蠟燭をつけ代へて頂戴な(燈灯を花子に渡して一々木陰を覗く)誰れも居さうもない。花子さん燈灯がついて。(といひながら歩いて行く)

花子。え、もうついでよ、持つて參りませうか？ 畑さん！ 何方の方？ あ、誰か窓を開けてよ。

陽子。ガスの光はあんなに明るさして來る。

花子。まあ、檜木はイルミネーションの様よ！奇麗ね。

陽子。誰れか何とか言つて居やしませんか？

花子。いえ。誰れも

陽子。然うですよ誰れか呼んでよ。

花子。いえ呼んでなんか居やしませんよ。

陽子。でも誰か窓から顔を出して居るんですもの。

花子。窓から顔を出して居ても、呼んで居ないのよ。ただちつとして何處か見て居る

の(四)山田さんは一體何うしたのでせう?

陽子。手傳に來て行衛不明になるなんて一體何したのでせう?

花子。何か深い煩悶があるに違ひがないわ。

陽子。先刻私達と一所に幕に刺繡して居たの。色々話しをしながらね。

(二人は校舎の方に目を投げる。)

花子。でも私の行た時は居なかつたわ。

陽子。あゝ、あなたの來る少し前迄よ。一寸五分ばかり前までよ。するとね、急に顔が眞青になつてはつ／＼と息使ひまで荒くなるんですの。不思議になつたと見えて知さんは針の手を休めて聞いたの山田さん何かしたのぢやなかつた。

花子。そしたら山田さん何んて言ひました?

(校舎側の樫木に倚るやうにする。)

陽子。——知さんは何處へ行たのでせう?

花子。小使の行た方でせう、きつと然うよ。

陽子。畑さん眞實に強い方ね!するとね山田さんは軽く笑ふのよ。そして何とも言はないで、針を幕の上へはつたり音させて置いて仕事を止めてしまつたの。

花子。妙な方ね。怖しく静な晩ですね。

陽子。私もこんな静かな晩は今まで見た事はないわ!窓を閉めたと見えて、また暗くなつてしまつた。

花子。燈灯の火は音をたて、燃えて居ますよ。ほら、蚊の鳴くやうよ。——畑さん

迷子になりやしないか知ら。(伸び上つて校舎裏の方を見る。)

陽子。小使の方へ行つたのなら大丈夫よ。

花子。あの小使は二人共薄ぼんやりだから眞實に仕様がないわ。

陽子。眞實にね!此方へ行らつしやいな。先刻の話をしませう。

花子。あゝ。(陽子にびつたりと併ぶ。)



を皆忘すてしまつてよ。

女學生二。朝になるとまた覚えるわ——其れに寐てから考へると能く思付くものよ。

女學生一。(快活に顔を上げて)ですけれども斯う眠くつちや寐てからなんか考へられやしくつてよ。

女學生二。ですけれども。あなたなんか些つとも眠さうに見えやしないの。私の目は

何んだか幕でも張つたやうに重いの、いやな感じよ。

女學生三。(列の後の方から抜け出て)まるで女優の夜歸と言つた形ね!

女學生一。(列を外れて)失敬だわ!

女學生三。だつて御覽なさいな、まるで然うとしさや見えやしないもの。

女學生一。あなたは女優の夜歸を見た事があつて!

女學生三。無いけれども何んだか然う見えるもの。

女學生二。然う見えるもの、では不確定だわ。

女學生二。叱! 誰か来た様よ。校舎の裏の方から足音がして来るやうですよ。

女學生三。然う澤山の足音が!

女學生一。皆な雪駄の音ぢやなくて?

(女學生の群はびつたり止まる。一樣に不思議さうに闇を透して見る。)

女學生一。(皆に向つて軽く手を舉げて)大丈夫よ、學校の人なの。

女學生三。寮の燈灯が見えるもの、然うに違ひないわ!

(此時小使甲乙、操子、陽子、花子の三人入り来る。皆なに一體して行過ぎやうとする。)

女學生一。畑さんぢやなくて? 何處へ行らしたの?

操。山田さんを探して。山田さんはあれから歸りやしないのでせう?

女學生一。え、山田さんはもう歸つたのぢやないの。私また歸つたとばかり思つて居

ましたわ! ぢや何處かへ行らしたのでせうか? 皆さん、何誰か山田さんを見

ませんでしたか? (皆に對つて言ふ。一同吃驚りする。)

操子寄。宿舍の夜を見るんだつて出たつきり、何うしても歸つて來ないの。あの方は黙つてお家へお歸りになる氣使ひはないのですもの、小使と一所に敵や探して歩

いたわ。

女學生一。其れでは妾達も一所に探ませう。

操子。いえ、何に好うござんすの、大抵もう見當がつきましたから。

(此間女學生二、三、四等は陽子、花子、小使等を捕へて何事が逃りに囁く。)

女學生一。(吃驚した様に操子の方へ)見當！見當つて、一體何處ですの？

操子。しつかりした事は私達にも解らないの、ですけども御嶽の方には御友達も居るし、あそこは大變に氣に入つてたんですから。

女學生一。御嶽の方といふの何方？

操子。世野田さん。

女學生一。あゝ、あの横笛の上手な。

操子。然う。

女學生一。ぢや然うに決定つたわ。急いでしらつしやう。もし其れでも居なかつたら

私達總懸りで探ませう、大丈夫よ。必然其や御嶽の方よ。

操子。左様なら(燈灯を舉げる)

女學生一。左様なら(燈灯を舉げる)

陽子。左様なら。

花子。左様なら。

女學生大勢。左様なら〜。

(再び静かになる。遠く三色ばかりの汽笛の音。花は更けて行く。右手校舎側から静かな話し聲と足音が聞えて来る。山田富子、二十三歳位、丈裕々高き方、細面ごころやら神經質らしき表情。鼠色の晋妻コート、丸髭。静かに、然し口早やに話しながら出て来る。世野田愛子二十前後姿なしにミョールを手に持ち急しげに四邊を見廻はし乍ら富子の跡を追ふ。)

愛子。奥さん！

富子。知らないわ！(少し笑ふ。)

愛子。奥さんと言はれるのが、あなたには然んなにいやなんですか？

富子其れよりも、愛さん、私を奥さんていふ人間計りだが考へて頂戴な。

愛子。といひますと。

富子。まあ誰々が私を奥さんて言ふでせう。

愛子。其れがどうして私に解りませう。ですけれども、山田さんの家の方はさう御仰しやる丈けは確かですわね。

富子。其れ丈けで充分ですは。私はね其奥さんといふ言葉を聞くところとするの！折角かうして其の冷めたい所を出て来て居るものを、もう私を苦しめなさいで下さな。

愛子。ぢやお話もしますまらね。

富子。ええ。出来る丈け。

愛子。出来る丈けつて、あなたは餘程吾儘な方ね。あなた御自分で氣のむいた時はいつでも話しかけなされるんですもの。

富子。だから、今夜丈けは充分私に吾儘さして頂戴つて、あんなに断つて置いたぢやありませんか！

愛子。そりや然うですけれども、私のお話したいと思ふ時は、あなたはいつでも黙つて居らつしやるんですもの。

富子。然うでしたか？

愛子。然うでしたかはしどいわ！

富子。ですけれども私は貴女に對しては充分お話してると思ふの。例令口で言はなくても心でお話してるのですからね。言ひたい事は何んでもお仰しやつてくださるな。唯だあなたは一人でお話してると思ひなされるので。どんな低い聲でお仰しやつても私にはちやんと解るの……能く解るの。

愛子。難有うよ！（と手を握る）

富子。御禮なんかいらさないの（愛子に手を渡して）何んといふ辭かでせう！

愛子。あなたの目の色の様に！

富子。目の色！（飛び退くやうに手を離して）私の。

愛子。ええ。私は何時でもあなたの目を見ると何となく静かな感じになりますの。

富子。ほう！私の目には静かな色なんか些ともありやしないの。私は反対にあなた  
の目に其れがあると思うわ。

愛子。まあ！然んな事が(笑ひながら)私なんかの目は木兎よ！

富子。木兎！木兎といへば、夫では私の目は始終物に驚いたやうな目だつて言ひま  
すの。驚ろいたやうな目なら木兎の様な目でせうよ。

愛子。飛んでもない事。

富子。木兎の目には兎に角静かといふ感じがないではありませんか。

愛子。多少あると思ふわ。

富子。静けさがあるとお仰しやるの？何うして？

愛子。木兎は夜の動物でせう？

富子。女も然うよ！

愛子。まあ！(と身を縮めて少し突ふ。)

富子。日本の女から夜を除にしたら生命がないぢやありませんか。

愛子。何處の女も女は大抵然うよ。

富子。フランスの女は夜會の爲めに生きてゐるんですつてね。

愛子。(間)もう餘程遅くなりました。夜露は下りてると見えて羽織はしつとりと濡れ

て居ます。

富子。シヨールをお懸けなさいな。もし何んならコートを上げませう。

愛子。勿體ない事を！あなたが濡れるぢやありませんか。

富子。私なんか何うでもいゝの。あなたは平生お弱いから。夜露程身體に悪いものが  
ないの。

愛子。では早く寮へ歸らうではありませんか。皆様も心配して居らつしやるでせう。

富子。心配したつていゝわ。夜露は身體に悪くても心にいゝの。眞實に私のやうに心  
の潤いた人間には。

愛子。あなたは眞實に木兎のやうね！

富子。ほうら、本兎でせう！



愛子。悪い意味の木兎ぢやないのよ、私のいふのは。

富子。ぢやいゝ意味なの？ 何んな意味なの？

愛子。好い意味でも其辨ないの。

富子。其れ丈けでは別らないわ。もつとはつぎつぎとお仰しやいな。

愛子。幾らばつぎり言つてもいゝ意味になりやしませんよ。

富子。だからいゝ意味でなくてもいゝぢやありませんか……あなたは随分人を苦しめるのね。

愛子。(心配さうに富子の手を握つて)あなたは大變に怒りつぱくおなりですのね。あなたは大變にお變りなすつたわ。

富子。いえ。私怒りはしないの、短氣は學校に居た時から病氣よ。(間)いえ生れた時からなの。此頃は私は其れが段々昂じて行くやうに思ふの。

愛子で。すけれども此處にお出の時、あなたのお怒りなすつたのを見た事はなくてよ。誰れが然らわあなたをしたのでせう？

富子。誰れもしないの。世の中よ。世の中の舊い習慣がかうしてしまつたんですの。

愛子。悪い習慣ね。叩いてやりませう。

富子。戯談ぢやないの、戯談に言ふやうな事ではないのよ。極く〜真面な事で、極く〜いゝやいな事。

愛子。其れや私だつて解りますよ。理解丈けは充分してると思ふの。

富子。理解だけでは駄目〜。

愛子。だつて仕方がないぢやありませんか。

富子。ですから強ひて理解以上の事を愛さんに要求しやしないの。一層の事理解もしてくださらないければ結局嬉しいと私思ふわ。

愛子。奥さん！

富子。いや！ 愛子さん餘程忘れつぱい方ね。

愛子。御免なさいね。富子さんなどは始終動いてる方なのね。

富子。動いてる！ 能く言つて下さつた。私の心は始終其動いてる状態にあるの——

ですから唯だ其れだけ理解される丈けで充分なんですの——もし私に戀人があつて  
いすね、是が假定なんですよ、其人が色々な誠心の記標を私に與へて呉れても、此  
一つの理解の爲めには私は其戀人に背を向ける事は出来ると思ひますの。

愛子。動して居て静かなんですね。

富子。ちや、やつぱり木兎なのね。

愛子。え、其意味で私もあなたを木兎だと言つたんですよ。

富子。其れなら難有いの。動して居て静かだといふ心地は私嬉しいわ。私はさつても  
然ういふ状態に居たいと思ふわ。丁度夜のやうにね。——ですけれども私に其の静  
な所があるでせうか。

愛子。充分あると思ふわ。

富子。何うだか怪しいわね。私自分ではないと思ふ。

愛子。私はあると思ふわ。だつてもあなたに逢へばさつても私静な感じがしますもの。

富子。ですけれどもね、私は實は其静になりたくないの。さつてもさつても動して居たい

の！

愛子。なせでせうか。

富子。いえと(手を振つて)動して居たいのではなくて、動して居なければならな  
れて居る。

愛子。誰れが然うさせるのでせうか。

富子。色々なものが一緒になつて然うさせるの、其内にはね、私を與さま〜といふ人  
も居るの、私を木兎だつていふ人も居るの、其ればかりぢやないの、

愛子。まあ！

富子。其れよりも〜死んだ私の弟よ。(問)あなたは弟の友達だから能く御存じの筈  
ですわね。

愛子。正夫さん！

富子。正夫の事をあなたに思ひ出せて。

愛子。あらあ、富子さん思ひ出せるかつて、ひさいわ！

富子。(手を持ちつて軽くく押しやるやうにして)思ひ出すと苦しんでせう、ですけれど

愛子。ですけれども思ひ出すには居られないんですもの

富子。弟はほんとうに私よりも世の中を考へて居ましたのね。

愛子。正夫さんは生きておいでの際は誰れも解して居なかつたのですね。

富子。自分だつて自分が解らなかつたんでせう。

愛子。解らなかつたから、あゝいふ最後をなされたのでせう。ですけれども誰か眞實に正夫さんを解しておやりなされたら、あゝいふ情ない事にならないで済んだのかも知れませんのね。

富子。駄目よ！いくら解してやらうつていつても、正夫は相手にしなかつたでせう。其證據には、あれの死ぬ前には先生方もお友達の方も皆捨て、おしまひなされたのですもの。

愛子。然うですつてね。山村博士などは正夫さんを何れ丈け心配したか知れないつて

從兄弟いとこなどを申して居りました。

富子。其れや眞實よ。

愛子。其れから大學の北村さんね、あの方も……。

富子。然うです。正夫は何方かといへばお友達の多い方でしたの。

愛子。皆なそして立派な方針かたはかりでしたわね！

富子。それでも正夫に言はせれば、皆下らないんですつて。——皆自分には『没交渉な動物』ですつて。正夫は少し高慢過ぎて居たと思ひますよ。

愛子。まあ、動物！

富子。高慢すぎるのは正夫ばかりぢやないのです。私の家の人は一體に高慢な遺傳を持つて來て居るんです。

愛子。そんな事ないと思ひますわ。

富子。何に！然うなの。昔は駄としても高慢が出來たんですの。高慢も出來たし生活も出來たんですの。さういふ考で世の中を渡らうとすれば、どうしても氣違にな

るか死ぬより仕方がないぢやありませんか。ね、愛子さん！

愛子。ですけれども正夫さんには其高慢な所などは些ともなかつたやうでしたわ。

富子。は、高慢では戀は得られないぢやありませんか……。

愛子。でも、正夫さんは戀を得る爲めに、自分を卑しくするやうな方では無かつたやうです。

富子。だから、やつぱり高慢なんですの。

愛子。ですけれども、私には充分柔しくして下さつたと思ひますわ。

富子。正夫は一體(と愛子を回顧つて)人を戀する事の出来るやうな男でせうか？

愛子。……何故でせうか(嘆息する)

富子。なせつて自分を失くして人を思ふ事の出来る人間でせうか？

愛子。其れを何故私に聞いて下さらなければならぬのでせうか。

富子。いえ、これは別に愛子さんに聞かなければならぬのぢやないの、唯だ私は自分に関心して見たいと思ふの。

愛子。……ですけれども正夫さんは充分人に愛される資格のある方だとは思ひますわ  
心を傾けて人に愛される、方だと思ひます。

富子。だから私の家の人は皆我儘だといふんですよ。(微笑してちつと愛子を見る。)

愛子。何故でせう？

富子。其れは私の家の人の癖よ。悪い癖なの。其癖私も其を充分持つてますの。

愛子。人に愛される癖はいくらあつても困りやしないぢやありませんか。

富子。いえ、其れはいけなないの。人を愛さないで人に愛されやうとする位悪い事はな  
いの——悪い事といふよりは不合理な事はないの。昔は殿様といふものがあつて、

祿を頂戴して遊んで居さえすれや充分に威張つて行けたんです。私の家の人は皆な  
かういふ時代の夢を見てたんです。人を愛さなくても人に愛されるものだとはかり  
考へて居ますの。

愛子。其れは愛ではないぢやありませんか。

富子。でも愛だと教へて來てるぢやありませんか(問)親は子を愛さなくても子は親に

は孝行をするものだともちやあんと定めて溜くんでせう。正夫はあれ位になるまで家庭の愛なんでものは些とも知らなかつたんです。

愛子。ですけれども正夫さんは富子さんの事は始終仰有やつてましたよ。

富子。姉さん／＼と私にはかり馴染で居ましたの……それやもう然うなの。ですけれども私は、繪具箱を買つてやつたり、サロンの繪畫集を買つてやつたりした外に何を正夫にしてやつたでせう。

愛子。私の知つてる丈けでも、あなたは正夫さんを充分にお可愛がりなされたと思ふわ。

富子。さう思はれるのは一層つらうござりますわ。

愛子。正夫さんは私を愛して下された位は富子さんをお愛しなされたと思ひますわ。

富子。……其れより以上かも知れませんわね。(愛子の顔を見ぬやうに)

愛子。其れより以上とお仰しやると!

富子。あれには戀する事なんか出来なひんですの!

愛子。まあ! (嘆息する)

富子。おや、御覽なさい! 北陽舎の配達車のやうですよ。もうそんなになるでせう

か! 私達は今まで何をしていたのでせう? 自分で自分が解らなくなつたやうな気がします。

愛子。面倒ですから、あすこの檜木の蔭へ隠れませう。(小走りに檜木の繁みに隠る。)

富子。然うね(と木に手を懸ける。)何んて冷たい木でせう!

愛子。夜露で洗い流したやうになつて居ます。

富子。なんて氣持の悪い事でせう。

愛子。皆な眠つて歩いて居るのでせうか。車の遅いつたらありませんね。

富子。三人でふら／＼揺れて歩いて居ますわね——酔ひどれのやうに。

愛子。あの人達は日が登れば駆け出すつもりにしてあるのでせう。

富子。なあに、あの人達は牧場から三崎町の北陽舎まで運搬する丈けなのよ、市内の配達は速ふのだから、あゝ緩りして歩いて居るのでせう。

愛子。静に！

(先刻の牛乳配達夫甲乙丙入つて来る。丙は居眠りながら少し遅れて。車は静かに進む。三人ながら歌して通る。)

富子。(大股に進み出て)皆な静かですこと。

愛子。まるで葬式のやうに。

富子。いつもなら追分でも歌つて大騒ぎなんですからね。私も寮に居た時よくあの人達の歌を聞いたもんです——何だか斯う心細くてね！

愛子。でも、あなたのあらしつた頃とは、人は皆迷つて居るでせう(間)あゝいふ人達は一體何うするのでせうか。

富子。何うて事もありませんでせう。たゞあゝして一生涯暮すんぢやないでせうか。

愛子。では餘り心細すぎますね。

富子。だつて、あの人達はそんな事考へやしませんわ。

愛子。さうでせうか。

富子。私なども能くさういふやうな事を考へて胸を痛めたものよ。丁度私の此處に居

た頃木屋の小僧で家の正夫と同年輩の子がおりましたの。其子が私には可憐相でくでたまらなかつたの、

愛子。正夫さんと同年輩で！ まあ！ (少し歩きながら)

富子。何うかして此子を教育して見たらとらふ氣になりましたね。學校へ車を挽いて来る度に遊ばしてやりましたの。色々な本の話を開かしたり立志談のやうなものを讀んで聞かしたりしてね。

愛子。文字が讀めるんですか？

富子。少しばかりよ。そしてお終ひにバイブルを呉れてやつたの。

愛子。バイブルを讀んだでせうか？

富子。「先生あの御本は大變利益になる事が書いてあります」とからふんですの。それから私嬉しくてね、色々な本を呉れてやつたの……すると……

愛子。すると……

富子。其次の年の春になつたら急に其小僧は來なくなつたの。私は不思議になつて、

其次ぎに来た番頭に聞くと『なかに、あれは一寸不都合があつて出してしまひました』と、かういふの……。

愛子。不都合てのは何ういふ不都合なんでせう。

富子。(無頓着な顔付で)……店の本を盗んだんですつて。

愛子。本を！ 盗みをするやうな子でせうか？

富子。私はさう思はないのですけれども本を外の品物と思はない丈け頭が進んで居たと思ふわ。

愛子。本を盗まなくても外にしやうがあつたでせうにね。

富子。あの子も正夫のやうに本を愛する子だと思ふわ。

愛子。本を愛しても盗まなくてもいいぢやありませんかね私ならさう思ふわ。

富子。正夫は本が欲しいつて能くお父さんと喧嘩したもので――思想を愛するものは思想の爲めに死んだんですわね。あれなんか一人の姉より愛子さんよりも思想を愛したのですね。

愛子。思想を――(嘆息して肩を下す)

富子。私が店の主人なら、あの子に店の本を皆背負はせて追ひ出してやるわ。

愛子。は、は、は本を背負つて餓死してしまつてせうよ。(と二歩ばかり歩く)

富子。え。それでいふの、正夫だつてさうでせう、思想を食べて餓死したのですの！

愛子。まあ！

富子。愛さん、遠くで誰か私の名を呼んでゐるやうですよ。はうれ、竹の葉でも裂く

やうな音の中で！

愛子。私には少しも。

富子。畑さんなどが私を探して居るのでせう。あれ、足音もするやうだ。

愛子。(間)すこし聞えるやうですよ。あゝ雪駄の音のやうです。では彼方へ行つて、あの人達を安心させやうではありませんか？

富子。もう私、人に逢ふのは苦しくなつたの、日の登らぬ内に歸りませうよ。

愛子。でも朝まで、まだ二時間もありますもの、寮にお宿りなすな。

富子。寮へ入りたくなつたの。それに朝になると私にも仕事がありますの。さやうな  
ら—

愛子。(追ひ付き)此暗いのは何うして一人で歸れますか?

富子。でも女には夜が一番適當してるぢやありませんか!

愛子。いえ、いえ。何うしてもお歸ししません!

○富子。(愛子の手を握つて自分の手と一緒に唇に當てて)愛子さん! あなたは私の手  
を離す様に、あなたの今迄で持て居たと思ふ物も離す時が來でせう!

愛子。(手を自由にさせて)あなたは謎のやうな事ばかり仰しやつて私を苦しめな  
るのね!

富子。謎! 私に謎を言ふやうな時があればいゝと思ひますの(手を離して)愛子さん  
あなたには私の目が見えないの?

愛子。富子さん!……(暫く富子の目を熱視めて、すゝり泣きする。富子愛子の顔を  
のぞく。校舎裏の方で太い男の聲と女の細い聲。)

富子。(急に左手を愛子の肩に當てて)左様なら!

愛子。(シヨールを落して抱きつくやうに)富子さん、どうぞ、どうぞ、夜が明けてか  
ら行らしてくださいな。

富子。(手を拂ひ退けて)大丈夫よ、愛さん!

愛子。此頃はほんとうに物騒なんですから。(追ひ付き歎願するやうにいふ。)

富子。一人の女には權威があるのよ。(笑ひながら愛子の首に手を當てて)大丈夫よ。

(急に手を離して寮舎側を音と反對の方へ小走りに行く。)

愛子。まわ! (深い歎息と、もに闇を透して蹲まるやうにする。)

(幕)

(一九〇九、三月)



# 第一の曉

曲夜さ影灯

時

一八〇〇年代のある秋

人物

狂ひ死ぬ青年。三津丸(誰られる人)

青年の友。三五郎

青年の友。平四郎

青年の友。行雄

青年の妹。八重野

八重野の乳母。

殿様の町のさむらひ大勢。

場所

ある島の北部、ある城下の郊外。

第一の曉

舞臺は一面の闇、時々灯籠の火や高張の黄色い光によつて其れが破壊され居る。灯籠と同時に、何時でも白刃を携へた武士が走る。橋の袂らしきところに、白い衣を頭に蓋へる若き女と、其乳母とがうづまつて、時々過ぎ行く人々に何か鋭く問ひかけて居る。

橋の左手森を越えて南方の空は、北光のやうに赤くいろざられて居る。河の水は眠さうな歌をうたつて居る、其響の間に町の方と河の方とで人々の叫ぶ聲がして居る。

八重野。乳母や、妾達は何うしやうね！ あれ、むかうの方があんなに明るいのの中  
 々夜が明けさうにもない。乳母や妾お兄さまが、何時でもお城の石垣の上に立つて  
 いのりの言葉を天にあげて居たといふのがあの赤い色を戀ひ慕つてお出でになつた  
 のではないかと思ふよ！（白い衣を少しあげて、森の方へ進む。）

乳母。あれ！ お姫さま、お危うございます。あなたは、其處に深い淵が大きな口  
 を開いて待つて居るのを御存じないのでございますか？ さ、さ、此方へお出であ  
 そばせ。（乳母八重野の袖をひく。）

八重野。妾お兄さまが長崎から持つて來られたあの美しいオランダの繪巻物を思ひ出  
 すと、お兄さまはあの繪巻物の中から生れ來て、そして、やつぱり其繪巻物の裡へ  
 歸つて行かれるのではないかと思ふよ。

乳母。でも、其三津丸さまは、今はもうあのおやさしい面影はそこへやら消え失せて  
 街から街と罪もない市民を切り捨て、御自分の兩の手が何をして御出でになるの  
 やら御辨へない悪魔のやうな御振舞。

八重野。そればかりではない、妾の聲をお兄さんの耳もとで何返もく御聞かせして  
 も、アラビアの砂漠を駱駝の脊に乗つて行く商人の息子の卑しい歌のやうに平氣で  
 聞き流して御出でになるのだものね！

乳母。袴も袖も血に染んで――

八重野。何處を目的ともなく此町を夜となく晝となく荒れまはつておいでなのだ。

（間）昨夜の事、妾はお兄さまが殿様のお廟屋の前の樅の木の下にしやがんで何か考  
 へ事をしてお出での時――

乳母。あの西口のいのりの樅木の下でございませうか？

八重野。その時、妾はね『お兄さんは何をして居なさるの』とお尋ねしたのよ。する  
 とお兄さまは血走つた目を妾の方へ向けて、赤い口を大きく開いて高く笑ふかと思  
 ふと、急に立ちあがつてお廟屋の下の方へ、下へ下へと下りて行くの！

乳母。お姫さまに何も御仰有らずに？

八重野。たゞ御兄さまの刀が木と石に觸れる音ばかりして、其度毎にあの大きな樅の

木からは針のやうな葉が落ちて、お兄さまの黒い亂れた髪の上に模様ようばなのやうにつらたの！ お兄さま！ お兄さま！ お兄さまは何處へ御出でになるのと聲を限りに呼びかけたの——

乳母。さして三津丸さまのお姿は星の井の方へは御出でになりませんでしたか？

八重野。お兄さまは、乗馬の歸にはきつとあの井で口をお洗ひなさつたのだものね。

乳母。そして三津丸さまは何んとも御返事をいたしませんでしたか？

八重野。たいね。インフェルノ！ 一言を残して、さつさと井の方へお急ぎなさる

の。桔梗の紫の間に、お兄さまの赤い大刀かたなの緒が小鳥のやうに動いて。

乳母。インフェルノ！ あゝお姫さま三津丸さまはパレンの悪婆あくばにみいられたので

ございませう。パレンの娘は殿御がなくて懐胎懐胎したといふではありませんか！

さ様な言葉はこの國では御禁制ごきんせいでござります。

八重野。乳母や、でも妾は、殿御がなくて懐胎懐胎だといふ事が偽いつはりではないと思ふよ。

乳母。まあ、お姫様とした事が、何して左様なことをお言ひ遊ばすのござります。

八重野。たい、妾には然う思はれてならないんだもの。

乳母。(急に驚いて左手町の方へ目を送り)あれ、あれ！ あすこに太刀の光が！

八重野。(急に衣を頭にのせて、乳母と顔を並べて目を闇の中に投げる。)

まあ、あの太刀の光は皆な、お兄さまを召し捕りの爲めに行くのだらう！ あゝお兄

さまは、この河岸を二日の間、何も召しあがらずに、餌をあさりに雪の上を歩む熊の

やうに荒れ廻つて居たのだ。

乳母。そして今朝がた、あの橋を通る朱鞘しゆさやの男をたゞ一刀に切り殺て、——その男の

赤い血が橋板を流れて紅のやうに河水に落ちて居たと言ひます。其血を見て三津丸

さまは高々と笑つて居たさうではございませんか(間)あれお城の石垣の上に大きな

高張は殿ではござりまするか。

八重野。——あゝ殿様はお兄さまの長崎から持つて歸つた、献上の鯨の形のマントル

を召して、河原の方を見て御出での容子。

乳母。(走せて行く一人の武士を避けて)あゝ、危い！ たつた一人の氣狂武士を召し

捕に、まあ業山けいざんなあの太刀の振りやう！

八重野。殿様は、あゝしてお兄さまの献上のマントルでお身體をお包みなされても、もう其贈手は此町の邪魔物！殿の刀がお兄さまの首の柔軟い骨を打ちくだいても何んとも、言へないのなものね！

乳母。私は三津丸さまと殿とお二人で、能くあの坂を學問所へお通ひあそばすのを御見受け申しました。——なんでも、それは今から二十五六年の昔で、その時にはお姫様はまだお生れ遊ばさないう時の事でござります。

八重野。お城の壕に添ふた、窓の下で、殿さまとお兄さまと地球儀を見つめて何か議論をしてお出なさるのを妾も能くお見かけ申したやうに思ふよ。

乳母。(急に頭を橋の方へ向けて)お姫様、橋の下で、刀の音がして居るやうではありませんか！あれ！お聞きあそばせ！

八重野。河原の中で焚いて居る火の周圍には白い鉢巻をした、さむらひが大勢、何か連りに話し合つて居るやうね。お兄さまが、もう召し捕られたのではなからうか？

乳母。いつその事、三津丸さまが御自害なされた方がよろしいのでござりますのにね。

八重野。御自害！やつぱり同じ事なのだよ。お兄さまの靈魂はもう天國に歸つておしまひなされて、その肉體ばかりがこの穢れた町に残つて居たのだからね。

乳母。穢れた町！この殿様の町が？

八重野。穢れたと言ふよりは、まあ死んだ町！

乳母。死んだ町！この殿様の町が？

八重野。あゝ、誰れか此方へ走つて来るやうね、二人は間に身をかくす。(

(沈黙)

三五郎。(二十四五歳黒きさむらひの着物に紫の裾模様ある袴、羽織の下から長い刀を斜にさして居る。他の二人の青年は陣羽織の如き形した外套を上かに套かふて、腰のあたりから黒く光る大刀が時々現はれてる。)

あゝ、寒い夜だ、そして怖い夜だ！(他の青年を回顧して)橋の上は雪のやうに白かつた。だが三津丸君の血は赤かつたね！

行雄。長崎に居る先生に、僕達三人が、三津丸君の肉體を、冷い此國の太刀で切り裂いてしまつたと知らせてやつたら何んなに驚くだらうね！

平四郎。(二人の顔を見つめて)君達の耳には女のすゝり泣くやうな聲が聞えはしないかね？

三五郎。いや、何にも。

行雄。君が江戸ですてゝ来た、お納戸町の戀人の聲が耳の中に残つて居るのではないかね？

平四郎。笑談を言つて呉れちやこまる。僕は今友達の死を思はなければならぬのぢやないかね！

三五郎。死を思う事もいゝが、僕は生きたものゝ事は一層思はなければならぬ。僕は此冬には此町に居ないかも知れない。

行雄。生きた、も一人の人間を雪の中に残して置いてか？

三五郎。其事だけは言つてもらうまい。僕はもう、あの女とは敵になつた。例令氣狂

とは言へ、現在兄を手にかけて、そしてその妹から戀を受取ることが出来やうかね？

平四郎。(また、二人の顔を見つめ、)やつぱり女の聲だ、心の臓の鼓動よりも確だ。

行雄。(少し笑ひながら)君の耳は餘程何うかして居るよ。君は何か病氣にかゝつて居るのだ。君は時々馬場で女が呼ぶやうな氣がしないか？ 大刀の先端に女の顔がちらつきはしないか？

平四郎。(眞面目に)もう僕は君とは話さないよ。さやうなら！(橋を下りて町に行く坂を急いで登る。)(三五郎君、僕はこれから歸つて少し寝やうと思ふ)(二人の方を回顧つて)朝にまた城で逢はう。

行雄。さやうなら！

三五郎。感冒をひかないやうにしたまへ、さやうなら！ 君はあの御廟屋の側に行くのか？ もしなんなら、僕の家を起して灯燈を持つて行つたらいいぢやないか？ 行雄。あゝ、もう行つてしまつた。あの男は、身體が大きい癖に、ほんとに神経の細

い男だ。僕等の仲間の中で一番確乎して居た男が一番先きに此世を去つた。  
三五郎。「インフルメルノが私を迎ひに来たやうだ」と三津丸君が僕に言つた事があるが、あの時は、もう頭が悪かつたのだ。

行雄。僕は君の刀があの男の胸に觸れた時、此河の水が一時流を中止したやうに思つた。そして橋の上の人々の燈は消えてしまひはしなかつたかと思つた。

三五郎。僕は三津丸君の皮膚の觸感を知つて居る(間)其僕は三津丸君の咽喉をさしたのだ。君。さむらひに涙がないと誰が言へるだらう！

行雄。三津丸君の爲めに此河の水が、とむらひの歌を合唱して居るやうだ。

三五郎。此國の人々は永い間大刀を使はなかつた。(間)湖の多い國の殿さまが此島國の歴史を編んで居る。僕を此殿さまに紹介して呉れたのが三津丸君だ。けれどあの男は殿さまの仕事を、湖のやうに小いと笑つて居た。

行雄。お、湖のやうに！

三五郎。三津丸君は殿さまの御呼びがなかつたら、こんな寒いせまい國へは來なかつ

たのだ。

行雄。あの男はもつと廣い國を思つて居た。鐵をもつて人を切るのがユーマニターなら、己れは三日の中に此町にインフルメルノを呼んで見せると叫んで、病床から脱け出て行つたと、八重野さんが話して居られた

三五郎。あ、三津丸君は、ある大きな曉の知せをもつて來たのではなかつたかな？  
そして、其知らせを受取る事を知らなかつた僕達の爲めに、あれが死んで呉れたのではなかつたかしら。

行雄。(橋の袖のところ立つて闇をすかして見る。)あ、下の橋の上を三津丸君の死骸が運ばれて行く(間)高張の火が泣いてるやうに搖れて居る。

僕等も死骸の跡を踵いて行かうか？

三五郎。(頭を振つて)無駄な事だ！あ、あの光を見たまへ！あの光りが此國の空を一面に赤く染る時には、僕等の友達が蘇生つて來る時だ！

行雄。僕等はこれから城へ歸らうか？

三五郎。僕は城へ歸りたくはない！あの冷い牢獄のやうな板間を踏んで何をやるのだ、空気の腐つた白壁の中から、藻の生へた藻を眺めて居て何をやるのだ。お城の石垣の上には、まだ殿さまが立つて居られる。淋しそうに立つて居る。三五郎。(歩きながら)僕は此友達を刺した鐵の片を捨てるどころまで行く。

(女のすゝり泣く聲。)

行雄君、其處には温かな春と自由といふ野があるのだ。國と國とが友達のやうに手を握る(間)だが、其處へ行くには、大きな戦争があるかも知れない。

(女のすゝり泣く聲止む。)

行雄。殿さまのマントルが捲かれて居る。

(二人は闇の中を坂の方へ進む。)

(二人の女も闇の中を幽霊のやうに進む。草履の音止む頃に幕を下す。)

(一九一〇、三五)

(第四回自由劇場試演)

### 森林と犠牲

#### 人物

三郎。 青年、學生、

おみよ。 姉、やゝ教育ある女、

長次郎。 おみよの夫、青年の義兄、

市之助。 青年の長兄(登場せぬ人)

二郎。 青年の中の兄。(悪病にて死せる人)

樂賣。 (同居人)

老婢。

おみよ。(腺病質の細面、美しい目、然し反抗的なメランコリイな表情。一種の影を背負ひ居るやうな體度。室の二隅土藏に對へる机に倚り弱々しい日影を眺めてゐる。編物と編針を持ち左手を血色の薄い頬に軽く當てゝゐる。)

藥賣。(六十位紺色の荷物を背負ひ。左手庭の植込の間から顔を出す。)奥様、私、一寸町の方へ出て参ります。室の方を、何うかよろしく。(覗くやうにして)やつぱりお精が出ますな。お身體に障りますよ。

おみよ。(やゝ快活に)然う、これからお爺さん出懸けるの。室の戸を閉めたでせうね。この間のやうに鶏が室へ入り込んだりしちや眞實に困つてしまいますからね。

藥賣。えゝ大丈夫で御座いますよ。(笑ひながら)あの時は、奥さん確かに閉めて出たやうに思ひますがな。が、まあ、それは何方でもよろしいので……。

おみよ。何方でもいゝなんて、ほんとに面白いお爺さんだよ。そしてお前さんはこの

冬の來る前に南の方へ歸るんだつてほんとうや。

藥賣。(椽に腰かけて)さやう。歸るやうになるだらうとは思つて居りますがな、何うなりますか私にも解らないのです。(間)。私は一體若い時から自分で自分を決定して通りにした事はたゞの一返だつてありやしないのです。はゝゝ、傍から大體決定つて來るもんですから、どうも致方がないので……。

おみよ。(淋しく笑ふ)ほんとうにね。でもそれはお爺さんばかりの事ぢやないね。

藥賣。えゝ、そういう風で、若い時分から斯ういふ商賣をして、方々巡つて歩いて居りますと、何方がいゝ何方が嫌いといふ事もなくなりましてね、それや奥様飛んだ氣樂なものでござりますよ。

おみよ。そしてお爺さん、今日は一人なの？ 夫では港へ行くなんてお言ひだつたが。藥賣。いえね。今朝方私にも然ういふお話しでムいしましたが、急に模様更になつてね。今彼處で鐵砲を磨いておいでムいますよ。

おみよ。鐵砲？ また森へ入るのですかね！



藥賣。なんでも三郎さんが今日市の學校へ歸るから、何か弊つて來るなんてね。旦那は何時でも元氣で結構です。奥様は仕合せ者だ。あんな旦那は何處を探したつて見付かりつこはありはしませんや。

おみよ。何が仕合せなんだらう！ お爺さん早く行つておいでなさいよ。

藥商人。(靜かに立上り)はい。奥様、それでは行つて參りませう。晩には早く歸りますから。

おみよ。あゝ。

## 第二節

おみよ。(再び淋しい表情に返り編物を手にし感興なげに仕事を續ける。母屋の方にて鶏の翼く音、銃器の板に觸るゝ音。)もう何時だらう。

長次郎。(襖を隔てゝ)おゝ。

おみよ。(其儘にして)何んです？ 何をなすつてゐらつしやるの。

長次郎。獵服だ。獵服だ。

おみよ。服ですか、服なら廊下に懸つてゐるぢやありませんか。

長次郎。ない、ない。ないから呼ぶんぢやないか！

おみよ。(立上り襖を開ける。廊下及び母屋の一部が見える。)それ、そこにあるぢやありませんか、何處を見てゐらつしやるの？ 自分の頭の上にあるものを！ それから、今日兄さんの方から手紙が來ませんでしたか？

長次郎。(廊下に腰かけて獵服の汚塵を拂ひ落しながら)手紙は來てゐるよ。己れは開いて見た。お前の兄さんは兄妹思ひだよ。この冬には此方へ歸るぞうだ。橋と馬の手入れをして置けつとよ。

おみよ。それつきりなの？ 事業の方は何うなつたでせう？ 何んとも書いてゐませんでしたの？

おみよ。(腺病質の細面、美しい目、然し反抗的なメラニンヨリイな表情。一種の影を背負ひ居るやうな態度。室の一隅土蔵に對へる机に倚り弱々しい日影を眺めてゐる。編物と編針を持ち左手を血色の薄い頬に軽く當てゝゐる。)

藥賣。(六十位紺色の荷物を背負ひ。左手庭の植込の間から顔を出す。)奥様、私、一寸町の方へ出て参ります。室の方を、何うかよろしく。(覗くやうにして)やつぱりお精が出ますな。お身體からだに障りますよ。

おみよ。(やゝ快活に)然う、これからお爺さん出懸けるの。室の戸を閉めたでせうね。この間のやうに鶏が室へ入り込んだりしちや眞實に困つてしまいますからね。

藥賣。え、大丈夫で御座いますよ。(笑ひながら)あの時は、奥さん確かに閉めて出たやうに思ひますがな。が、まあ、それは何方どこでもよろしうので……。

おみよ。何方でもいゝなんて、ほんとに面白いお爺さんだよ。そしてお前さんはこの

冬の來る前に南の方へ歸るんだつてほんとう?

藥賣。(椽に腰かけて)さやう。歸るやうになるだらうとは思つて居りますがな、何うなりますか私にも解らないのです。(間)。私は一體若い時から自分で自分を決定きまて其通りにした事はたゞの一返だつてありやしないのです。はゝゝ、傍から大體決定つて來るもんですから、どうも致方がないので……。

おみよ。(淋しく笑ふ)ほんとうにね。でもそれはお爺さんばかりの事ぢやないね。

藥賣。えゝ、さういふ風で、若い時分から斯ういふ商賣をして、方々巡つて歩いて居りますと、何方がいゝ何方が嫌いといふ事もなくなりましてね、それや奥様飛んだ氣樂なものでござりますよ。

おみよ。そしてお爺さん、今日は一人なの? 夫おつとでは港へ行くなんてお言ひだつたが。藥賣。いえね。今朝方私にも然ういふお話しでゝました。が、急に模様更になつてね。今彼處で鐵砲を磨いておいでゝますよ。

おみよ。鐵砲? また森へ入るのですかね!

薬賣。なんでも三郎さんが今日市の學校へ歸るから、何か弊つて来るなんてね。旦那は何時でも元氣で結構です。奥様は仕合せ者だ。あんな旦那は何處を探したつて見付かりつてはありはしませんや。

おみよ。何が仕合せなんだらう！ お爺さん早く行つておいでなさいよ。

薬商人。(靜かに立上り)はい。奥様、それでは行つて参りませう。晩には早く歸りますから。

おみよ。あゝ。

## 第二節

おみよ。(再び淋しい表情に返り編物を手にし感興なげに仕事を續ける。母屋の方にて鶏の翼く音、銃器の板に觸る音。)もう何時だらう。

長次郎。(襖を隔て)おゝ。

おみよ。(其儘にして)何んです。何をなすつてゐらつしやるの。

長次郎。獵服だ。獵服だ。

おみよ。服ですか、服なら廊下に懸つてゐるぢやありませんか。

長次郎。ない、ない。ないから呼ぶんぢやないか！

おみよ。(立上り襖を開ける。廊下及び母屋の一部が見える。)それ、そこにあるぢや

ありませんか、何處を見てゐらつしやるの？ 自分の頭の上にあるものを！ それ

から、今日兄さんの方から手紙が来ませんでしたか？

長次郎。(廊下に腰かけて獵服の汚塵を拂ひ落しながら)手紙は來てゐるよ。己れは開いて見た。お前の兄さんは兄妹思ひだよ。この冬には此方へ歸るぞうだ。楯と馬の手入れをして置けつとよ。

おみよ。それつきりなの？ 事業の方は何うなつたでせう？ 何んとも書いてゐませんでしたの？

長次郎。書いてゐない。だが、一體あんな事業は危険極まるものだ。政治家が選挙に失敗したからつて商賣に手を出すなんて、一體間違つてゐるよ。

おみよ。そんな事、私などに解るものですか。でも選挙なんていふもの私、考へても怖しくなる。(何かの影に襲はるゝやうに、)十日も二十日も出歩いて、家には大勢の居候がごろ／＼寝轉んでゐるし、家に居たかと思ふと、まるで喧嘩のやうに議論を初める、巡查や探偵が夜晝家の周囲を歩いてゐたり(間)あの頃は、あなたは未だ家へ來ない時でしたわね。

長次郎。うむ。己れは東京から歸つたばかりの時だ。何んでもあの頃は兄さんは僕の親父などの政敵で、しきりに親父の私行を曝露あはしたりなんかしてゐたよ。(服を着ながら)鑛山を何うしたとか市の銀行が何うしたとか。己れは一體政治運動が大嫌ひだから黨派心なんて少しも無かつたんだ。この家に東京歸りの美しい娘がある位はよく知つてゐたよ。

おみよ。(眞面目に、おど／＼して)そして私は何んな人間だか知つてゐらしたの？

そして兄さんの事なども？

長次郎。兄さんが二人あつて、中の兄さんが何處かのお寺へ行つてゐる内に、其處で死んだといふことも知つてゐるよ。

おみよ。(呼吸をはづませ、然し静平を装ひ)然う。よく知つてゐらッしやるのね！

長次郎。(獵装のまま、靴袋を携へ室に入り)知らなくつてさ。お前の兄さんだもの。それから三郎は今日學校へ歸るさうだから己れは一つ御馳走してやらうと思ふんだ。

(靴袋を椽端に投げる。)だが三郎は近頃何うかしやしないか？ 今朝も己れの室へ來て色々な事を言つてたよ。

おみよ。色々な？ (氣遣はしげに)

長次郎。色々な謎のやうな事だ。兄さん、あなたは、眞實に幸福な人だ、私もあなたのやうな幸福な人になりたい……そして、あなたのやうな人は何んな影の中に入つても其影に捕はれない人だなんて……己れ達の學生時代にも随分詩人がゐたよ、だから大抵の思想だけは理解が出来るんだ。

おみよ。(土蔵の壁の上に、力なげに目を投げてゐる。)

長次郎。然んなことを言ふかと思ふと、「あゝ冬の來るのが怖しい！」なんと泣きさうな顔をするんだ。(足を伸して掌で打ちながら)自然の美を歌ふとか人間の元氣を鼓舞するとかいふ方面の光明の思想は少しもない。

おみよ。(氣を變へて)然うかも知りませんね。ですけれども、私はもう他人の事は考へないやうに決定めました。三郎の事も誰の事も。

長次郎。そんな事があるものか。

おみよ。だつて、他人の事よりも自分の事がもつと大事ですからねえ!

長次郎。そんな思想が危険なのだ。三郎もそんな事を云つてたよ。市の學校にゐても一度も家の事なんか思つた事がない。そんな事を思ふと自分の身體が死んでしまふといふんだ。

おみよ。やつぱり姉弟だから似てゐるんでせうよ。

長次郎。(立ち上り、靴を穿き)いけな〜。それがいけな〜んだ。それでも三郎は

兄さんと姉さんは、何時までも幸福にしてゐて呉れえと言つてた。ちや、森を一周して來るからな。(銃を肩に懸けて、土蔵の前を右手に入る。)

おみよ。(見送りもせず、ばんやり立つてゐる。)(三郎は何をしてゐるのだらう。婆や、婆や〜)

### 第三節

老婢。(五十歳位、下婢としては身奇麗な且つ品のある女。)(奥様お呼びでござりますか。おみよ。あゝ、三郎は何處にゐるの?)

老婢。奥の六疊にゐらつしやりますよ。お呼び申しますせうか?

おみよ。いえ呼ばなくてもい〜よ。あの人は何をしてゐる容子だらう。

老婢。それが奥様、私には些とも解らないのでござりますよ。室を閉て切つたま〜で

黙つてゐらうしやいます、そして誰れも室を開けてはならぬと申すのでござりますよ。

おみよ。室を。

老婢。はい。そしてこの室の中には黒い布で顔を包んだ化物があるなんてお仰有るの  
で……………

おみよ。お、そんな事……そんな事を(老婢の言葉を否定するやうに)あれは、なせ  
そんな事を言ふのだらうね？

老婢。……………

おみよ。そして今日は町から誰れも遊びに来やしないやうかね？

老婢。今朝方若いお友達の方が、二三人お出でになりましたが三郎さんもお友達には  
中々元氣にお話なさるやうでござります。

おみよ。いえ、其れは三郎ばかりでなく、家の兄妹は皆な然うのやうですよ。ほん  
うに三郎ばかりでも、普通の人間のやうにしたいといふ、其ればかり願つてゐ

ると、やつぱり一年毎に兄弟に似て来るのだものねー

(重い車の地を走る音。單調な喧噪しい話聲が遠くに聞える。)

おみよ。また大砲の行列だらうね。

老婢。(左手植込の間から屋外を覗く。)左様のやうで御座います。なんでも廣野ひろのの演  
習で、士官が負傷をしたとか、死んだとかいふ噂で御座いますよ。

おみよ。まあ！(机の傍にぞんざいな座り方をする。老婆は座布団なしに離れて座  
る。)何うして、そんな手ぬかりな事をするのだらうね？

老婢。何ういふ譯でござりますかね。何んでもその士官様は大變に出来るお方で、行  
くは旅團長にも、師團長にも、なれる人だ、なんてね、あの薬屋さんが言つて  
居りましたが、何しろお可愛相な事でござりますよ。

おみよ。ほんとうにね。そして薬屋さんは、此頃は些とは商賣がありさうかね。此冬  
の來る前には南の方へ歸るんだつて話だが婆やは何も聞かないの？

老婢。この頃はちよいと然ういふことを申すやうでござりますが、あまり商賣も思

はしくありませんし、あれで、ひびき寒がりでございますからね。ほんとうに年寄に  
寒さは毒なものはないのでございますものね、奥様。

おみよ。婆やなども温い國に生れた人だからさぞ此方の冬はつらいだらうね。

老婢。でもこれで寒い處では寒い處のやうに要意がござりますから、それに斯うして  
何不自由なく此方さまのお世話になつて居りますのでござりますからね。

おみよ。一體爺さんの薬は何んなものなの？

老婢。蟲の薬とダラスキイとかいふので、今時の若い方にはもうお解りになりません  
でせうよ。お爺さんはそれでも何んな病氣にも利くのだからと觸れて歩くのでござ  
りますよ。(少し笑ふ)

おみよ。(淋しく笑ひながら)私は、あのお爺さんがあゝして紺の風呂敷包を背負つて  
町へ出て行く後姿を見ると、あんな人の薬を買ふ人もあるのかと思つて、ほんとう  
に可笑しいやうな、かなしいやうな氣になるの。

老婢。ところが、奥様、あの蟲薬とダラスキイつてのは、まだく重資がられるので  
ござります。

おみよ。一體何んな人が買ふの？

老婢。何んな人つて、あなた、ステーションでも、待合茶屋でも、お寺でも、學校で  
も何處でもお爺さんが買つてありくのでございます。最もね、兵隊さんの前ではあ  
れを出さないことにしたさうでございます。

おみよ。何故だらうね。

老婢。それが可笑しいのでございます。兵隊さんにはそれより立派な薬が澤山あるの  
ださうで、お爺さん大變に叱られたことがあるつて、自分で然う申して居りました  
よ。

おみよ。まだ行列が通り切らないと見えて車の音がしてゐる。市の方へ歸るのだらう  
ね。

老婢。(立ち上り、目を植込の方へ投げる。)お爺さんはステーションの前で、其勇しい

行列を拜むのたつて大變に威張つて居りました(間)おや車の上に旗が樹つてゐるやうでございますよ。

おみよ。(同じく立ち上り、老婢と並び)旗の下に何んだか四角なものがあるぢやないの？

老婢。四角な箱のやうなものが、黒い布で包んでゐるやうでございます。

おみよ。黒い布！ 黒い布で箱を包んでゐるの？ それぢややつぱり……

老婢。死んだのでございませうね。

おみよ。死んだのだよ。婆や。

老婢。眞實の戦争では死なずに、こんなところで、死ぬなんて何といふ不仕合な方でございませうね。

おみよ。だけれども婆や何處で死んでも死ぬのは同じだからね。(空想的に)若い士官が大砲の弾丸に撃れて死ぬなんて、何だか勇しさうね。赤い血が黒い軍服ににじんで、蒼醒た皮膚が、ねばくしてゐて、私はそんなものに觸つて見たいやうな氣がする。

老婢。(驚いて、奥様は、まあ飛んでもないことを！)

おみよ。いえ、ほんとうだよ。私は壯健な男の血の色が大好きだよ。都にゐる時は能くあの戦争の記念館へ入つて、他のお友達が目を閉つて通る戦死者の軍服の前なんか平氣で卅分も四十分も立つて見てゐた。だつて何んだがこれが其勇しい男の身體を包んでゐた、これが其人の身體を循つてゐたのだと思へば何となく懐しく思はれるもの。

老婢。何うして、まあ、そんな！ (座に歸り、おみよの顔を不思議さうに見る。)そして奥様は、其死んだ方が可愛相だとは思ひにならないのでございませうか？

おみよ。いえ、可愛相だと思ふ前に、何うしてそんな若い人達の血を斯うして流さなければならぬのか、それか不思議になるの。

老婢。まあ、それが不思議でございませうの？

おみよ。あゝ、不思議だよ。

老婢。でも戦争ですから仕方がないぢやありませんか。あの人達が死ななければ、こ



の國の人達は安心して生きてゐることが出来ないと申すぢやありませんか。  
おみよ。然うね。(笑ひながら)婆やには息子があるつてお言ひだね。

老婢。はい。二人ありますが、一人は養子にやりました、もし一人は朝鮮へ行つて居りますが、此間見ていたのはその朝鮮へ行つて居ります方のでございませよ  
おみよ。(以前の机に倚り)そして皆な健康なの？

老婢。え、健康は健康でございませすが皆な馬鹿者で仕方がないのでございませ。

おみよ。それがいゝのだよ。一體人間といふものは、智慧があるの、伶俐だといふのは何にもなるものぢやないよ。赤い血を流すやうな人には、そんなものがな  
だね。赤い血を流すやうな人には、そんなものがなくても結構暮して行けるのだよ。そんな人は血が赤いからやれ手術だの、やれ注射だのといつて騒がなくても翁さんの虫薬やダラスキイで直ぐに治るのだからね。(おみよは淋しく笑ふ。老婢はやゝ攪亂されて女を見る。)だから、私はそんな人の赤い血が好きさ。

老婢。さやうでございませすかね。(殆んど理解なしに。)

おみよ。さういふ人は私は大好よ。だけれども私の兄弟にはその赤い血などは些ともないのだらうよ。三郎は、いつか私達はこの大きな森の影になつてゐるからいけなのだ、姉さんは早くこゝを逃げてゆけるのが羨しつて汽車の窓のところ私に言つた。(考へて)中の兄さんなどは、この森の影になりすぎて、あゝいふ病氣になつたのだらう。さつと然うだ。兄さんはいつでも日の影を見ずに暮してゐられた。

老婢。(心配さうに、女の聲を遣ら)まわ、奥様、さやうな事をあまりよく〜お考へ遊ばさない方がよろしうございませう。

おみよ。中の兄さんの失くなられた頃は婆や家へ未だ來ない時だつたね。その兄さんが病氣で死んだといふ事を婆や知つてゐるの(試みる如き表情。)

老婢。さやうでございませす。(聲を小さくして)實は奥様、その事は藥屋の翁さんに聞いて存じて居ります。はら。

おみよ。あの翁さんは六年ばかり此地へ來なかつたのだよ。その間、あの人は温い島の方を買つて歩いたのださうだ。(間)その次ぎの廻りにあの人が家へ來た時は兄さん

んはもう赤い血を少しも持つてゐなかつたのだよ。

老婢。まあ、赤い血を！

おみよ。然うだ。翁さんは、中の兄さんを子供の時から可愛がつてゐた。そしてあの森の外の野道をよく連れて歩いたものよ。翁さんは私を少しも可愛がらずに、中の兄さんばかりを可愛がつてゐた。

老婢。何うしてござらませう。

おみよ。そして、あの邊にはステーキシヨンも、ソーレルも何もなくて、廣く野原だつた。中の兄さんはあの翁さんに連れられて、ガラスのやうな透き通る顔をして歩いた。草の葉で翁さんが笛を作へてやると、兄さんはそれを吹くのだ。二郎さんが笛が上手だつて翁さんがよく私達に話して呉れたよ。(間)その兄さんは六年目に翁さんの来た時はもうもとの兄さんではなかつたの！

老婢。あの翁さんも、さぞ落膽したでござらませうね。

おみよ。あゝ、家へ来て其事を知つてから、薬を賣りにも歩かずに、あの室の中に寝

てばかりゐたよ。十日も廿日も。

老婢。まあ！

おみよ。それでも、一番上の兄さんが翁さんに逢つた時、「私にはぢやんと此事が解つてゐました。」「この事は昔の本に書いてある」と斯う言つたものよ。

老婢。お翁さんは私にもさう申して居りました。これは目に見えなから應報いひがらの所業で、人間の力では何うすることも出来ない。(一段と聲を低くして)悪い血が人間の指の先に潜ひそんで、何代も何代も表はれて来ないことがある。その血は何んな正しい血統のお家へでも遠慮なく出て来るのだ、斯んなことも申して居りました。

おみよ。だから、お翁さんには兄さんのあゝなるのが解つてゐたといふのは嘘ぢやないと思ふよ。

老婢。私はあの翁さんはお禁厭かきげんをするのを見たことがござりますよ。

おみよ。お禁厭？ あゝ私も見たよ。だけれども年老つて人は誰でもお禁厭をするやうに思はれるのね。婆やも始終何かぶつ／＼言つてゐるのよ、あれや、やういふお禁

厭ぢやないの？

老婢。(笑ふ)まあ、奥様、あれはお禁厭ではござりません。お念佛でござりますよ。  
おみよ。ちや、やつはりお禁厭のやうなものぢやないの。

老婢。(眞面目に)いえ、何ういたしまして。お念佛とお禁厭とは飛んだ違ひでござりますよ。

おみよ。然うたらうね。(軽く笑ふ。)それは然うと、大變に寒くなつたやうね。

老婢。(庭に目を投げて)今頃になりますと森の方から冷い風が吹いて來ますことね。  
斯うして座つて居りましたも、手なぞひやくして參ります。

おみよ。(老婢の言葉に感嘆されたやうに頓えて)もう冬が來るのだね。冬とらふものが世の中になくなつたら、私どんなに嬉しいだらうね。私は冬といふ文字を書いても身願ひがするよ。(間)それを夫では、冬が來ればいゝ、冬が來ればいゝつて、珍しいお客でも迎へるやうに喜んでゐるのだもの。いやになつてしまふよ。(鶏の翼く音、山羊の鳴く聲。)

第四節

山羊をもう檻へ入れる時が來た。婆や、早く稚子わらわに然うお言ひ。それから夕飯の仕度をさせなくてはいけませんよ。(老婢は立つて廊下へ出る。)

三郎。二十五六歳、色白、丈や、高さ男。和服。姉より一層神經質的ではあるが、顔のみは比較的壯健に見える。林檎の木の下を歩みながら室の方に進む。おみよは音に氣付いて呼び掛ける。(

おみよ。三ちゃん！

三郎。何に？

おみよ。三ちゃん、今まで何をしてゐたの？ 此方へおいでなさいよ。

三郎。兄さんゐるの？

おみよ。おなひ。また森へ行つたの。お前さんが今日學校へ歸るから御馳走するんだつて、鐵砲を以つて行つたよ。

三郎。(椽に腰かけて)御馳走なんか僕もう食べる氣はないね。早く市の學校へ行きたい。學校のチャペルで西洋人の顔を見たり、寢言のやうなバイブルの講義を聞いたりしてゐるのが僕には一番嬉しい。

おみよ。それでも、休暇の前日には、あんな手紙を遺した癖に。お前眞實に今日歸らなけりやならないの？

三郎。それに、姉さん、僕この休暇の間に怖しい發見をしたよ。

おみよ。發見？ 何んな事、さあ、何んな事さ。

三郎。發見と言つては悪い、疑ひが除かれたと言つた方がいゝ。(顔を胸に付けて) 其代りに確信の若痛が來たんだ。姉さん、もう僕は西洋の詩や芝居の眞似をしてゐるのではない。兄さんなんか、僕は何か言ふと、すぐ二口目には、三ちゃんも詩人だ、詩人はよくそんな事を言ふものだ、なんて、言ひ出すんだもの。詩といふ言葉を凡

ての思想を否定する前置詞のやうにしてゐるのだ。(間)だから僕もお終ひには謎のやうなことを言つて、其場を外すやうにしてゐるのだ。すると、自分は、其謎を説く事を知らないで、今の青年は思想を徹底して主張する力がない、なんて言ふのだ。おみよ。(淋しく笑ひ)そして其は何んなことなの……そんな事を言つてゐないで、早くお言ひよ。

三郎。姉さん、僕は怖しい發見をした。けれども、今も言つた通り、詩や芝居の眞似をしてゐるのぢやないんですからね。そして姉さんの言葉の次第によつては、何うとか處決をしなければならんと言ふのでもない。たゞ事實を確かさへすればいんです。たゞ此事だけは言つて置く。

おみよ。(頭を垂れて。ある豫想に對して恐怖を感じる如き表情)一體何んな事なの？

三郎。姉さんは市之助兄さんの室を使つてはいいから、くれぐれも僕に言ひましたね。

おみよ。あゝ、言ひましたよ。そしてお前さんは、あの室を使つたとでも言ふの？

三郎。使つたばかりではなく、あの室の兄さんの手文庫を皆な開いて見ました。(女は急に色を變へる。)兄さんの手文庫を開いて見たつて大した罪惡でもないでせう。肉身の兄弟ですもの。ほんとうは、必要の場合には自分から開いて見せるだけの親切がある筈です。

おみよ。(唇を頰はせながら)そんなく、そんな馬鹿なことがあるものか! あれほど、兄さんから確く言ひ付かつたものを、私、どうしやう!

三郎。あの中には何が入つてゐると思ひます。そしてそれが姉さんの知らない事です。うか。

おみよ。知らない、私は知らない!

三郎。(椽先を歩みながら)だから、僕先刻から言つてゐるのです。姉さんにこの事を聞くのは芝居の真似ぢやないつて。西洋の芝居には姦通を自白させやうとして、其妻君にラムプを打ちつけるのがあります。(意外な辭平を得ながら)僕は今そんな事を姉さんに對してするのではない。たゞ事實を言つてもらひたい。

おみよ。(やゝ元氣を恢復し得て)三ちゃん。お前一體何うして、あの箱を開けたの! あんなに堅く錠を下して置いたものを!

三郎。姉さん、僕だつてもう子供ぢやないんです。そんな子供らしい……

おみよ。(椽先に布圍なしに進み出て)そして一體何うして、あれを開けて見る氣になつたの!

三郎。何うか落ちついて聞いて下さいよ。僕は中の兄さんが、あの森の中で失くなられた時には、正直な話が、兄さんの病氣の苦痛がなくなる丈けでも幸福だと思ひました。兄さんは永い間、あの黒い風呂敷のやうなもので顔を包んで、日の光も碌々受けずにゐました。たゞそれだけの苦痛でも、何んなでせう。

おみよ。あゝ、もう然んな事は……

三郎。(姉には無頓着に、庭の地面を見つめながら)あのお寺に入れられた頃は、もう兄さんの血は人間の血ではなかつたのです。黄色の膿が血と一緒に、あの黒い布の上にはじみ出てゐたのです。

おみよ。何うぞ後生だから、そんな事を言はないでお呉れ。三ちゃん後生だから……  
私は病氣になる。(顔を掩ふ)

三郎。あゝ、僕は幼い時から、あの兄さんは大好きだった。その兄さんの病氣はそれ  
なんだ。市之助兄さんは、あの時、自分達の家の血統が正しいといふ事を証明する  
爲めに何んなに苦心したでせう。私達の家の系圖には、たゞ一人の悪病に罹つた人  
はないと言つて私達二人の前に古い煤けた巻物を幾つもくも出したのを覚えてゐ  
るでせう。

おみよ。あゝ、能く知つてゐるよ。だけれども三ちゃん、そんな事は他人に聞えても  
良くないし、後で學校の方から手紙にして届けてよこしていゝから、何うか止して  
お呉れ、ね！

三郎。こんな事手紙などに書れることですか！まあ、話の續きを言はしてもらひませ  
うとして唯だ二つ答えてもらひたいことがある。それは中の兄さんの死ぬのを兄さ  
んと姉さんと知つてゐたのでせう？

おみよ。飛んでもないこと！三ちゃん馬鹿なことを言ふものぢやありませんよ。

三郎。それに就いて姉さん、僕は今まで姉さんや兄さんに秘して置いた事をお話し  
たいと思ふ。聞いて呉れますか？

おみよ。私達に秘して？

三郎。言はうゝと思ひながら、とうとう今まで一言も言ひ出す機会がなかつたのだ  
機会があつても、言ひ出すだけの元氣がなかつたのだ。

おみよ。一體それは、何んな事なの？

三郎。ぢや、僕言ひます。(四邊を注意しながら)僕はあの市之助兄さんが選挙運動の  
真最中に、始終ある怪しい男に尾行されてゐました。その男は兄さんのあの頃の一  
舉一動を探偵してゐたのです。そして僕に色々な事を言ふのです。聞くに堪えない  
事を僕の下宿へ来て言ふのです。

おみよ。そんな事があつたの、そしてあの頃お前さんは家へは一返も手紙をよこさな  
かつたね。

三郎。その男は私の目の先に何か書いた紙を突き付けて、明日の朝からでもお前の家の凡ての罪悪はこの市の人ばかりでなく全国の人々の目に觸れるのだ。斯ういふのです。

おみよ。そして、そしてお前は何うしたの？

三郎。私は其男の爲めに外套も時計も皆な取られてしまいました。そして其紙は僕の手に入つた。紙の價值はそれで濟んだから随分安いんだ。けれども、僕がその時から得た疑問は決して安いものではなかつた。

僕は實は姉さんと兄さんを色々なことで試みやうとしたのです。

おみよ。まあ！

三郎。だから、初めの心持はやつぱり詩や芝居の心持でした。肉身の弟が兄や姉を試みるなんて事は、如何にも痛切に思はれるぢやありませんか。(靜かに)けれども、それが段々馬鹿らしくなつて來ました。姉さん、僕は幼い時から随分兄姉思ひだつたのです。それは姉さんも承認してくださるでせう。今の僕の心持はやつぱり子供の時の心持です。

おみよ。(目を閉ぢて弟の言葉を追ふ。時々影に襲はるか如き表情。)

三郎。其男の持つて來た紙に何んな事が書いあつたと思ひます。(間)「妹の結婚と彼自身の政治上の野心の爲めに」といふやうな文字が何返も／＼繰り返へされてゐました。

おみよ。そんな事が――！

三郎。それから、「森林」なんて文字が赤い筆で二重に點を打つてゐました。そんな馬鹿な事があつて堪るものかと、最初の内は始んと意識の内に入れやうとしなかつたのです。けれどもそれが不思議に時の經ち次第、段々私の心に強／＼根を持つやうになつた。僕はそれから色々な事で兄さんを試みたのです。

おみよ。(やゝ反抗的に)それはお前さんの勝手だ！ 姉さんはもう誰れの事も考へないつもりにした！

三郎。それがいゝんです。姉さんがそんな心持になつたのが却つて僕には嬉しい。(間)

兄さんの手文庫の中で発見した事件は決して法律上の問題でもありません。たゞ冷かな心を以て承認しなければならぬことなのです。

おみよ。手文庫へいつていふけれども、一體何んなものが入つてゐたといふの？

三郎。姉さん、あの手文庫の中には中の兄さんの影が入つてゐるのです。そして其影が弱々しく顔えてゐました。

おみよ。兄さんの影？

三郎。兄さんの影ばかりではない、姉さん、あなたの影も？

おみよ。私の影？

三郎。あゝそればかりではない、其影の中に僕の影も入つてゐる。そして同じこの森の下に生れた四人の兄弟は同じ色の影に包れてゐた。私達は何んなに漂蕩しても其影の中を出ることが出来なくされてゐるのです。

(口笛の音遠く響く。山羊の鳴く聲)

姉さんは、その影を承認して呉れますか？

おみよ。(立ちあがり左手の方に進む)口笛の音次第に近づく。

三郎。(姉の姿を追ひ)中の兄さんの手紙には「妹」といふ文字が恰度二十丈け書してあります。(姉は急に止る)「死」といふ文字の繰り返へされる度に兄さんは顔えながら姉さんの名を書いてゐた。

おみよ。(眩暈を覚えるやうに柱に手を懸け其上に顔を載せて、烈しくすすり泣く。)

三郎。その手紙の中には、市之助兄さんと、姉さんの心持がよく表れてゐるのです。

おみよ。(突然反抗的に)それでは私達二人は、中の兄さんを殺したとでも言ふの？そんな馬鹿な事を言ふものぢやありません。

三郎。(無頓着に)それが恰度、中の兄さんの失くなられた一週間前の日附になつてゐます。事實は事實として承認してもらひませう。

(口笛の音益々近づいて来る。)

おみよ。私はね、先刻も言つた通り私自身の爲に生きて行くより仕方がないのですからね。然ういふ馬鹿氣な事に一々返事をする義務がないのです。



三郎。ですけれども。僕は中の兄さんの復讐をするといふやうな馬鹿な事はしない積  
ですから、御安心なさい。僕は何うかしてこれから、其影から逃れて眞實の意味で  
生きて行きたいと思ふのです。僕は決して厭世論者ではなりのです。

(此時老婢は下より室に入る。女の目は驚る如き表情。男は眞面目な態度を以つて老婢を見る。)

第五節

老婢。(三郎に對ひ)お友達の方が多勢お見えになりましたして御座います。

三郎。(力なげに立ちあがり)然うか、すぐ行くと然う言つてお呉れ。衣服を着更へて  
行くから其間僕の室へ入つてゐるやうにね。

おみよ。(自然に弟の方へ進み)三ちゃん、ちや、やつぱりこの瀟車で歸るの？学校の  
始まるのは、まだ二三日あるのだから。

三郎。あゝ、だけれども僕はもう家に居るのが苦しいんだもの。

老婢。ほんとうに廿日と言つても暮して見ると早いものでござりますものね。奥様、  
眞實にまだ二三日はお直しのぢやござりませんか。

三郎。婆や洋服を出して置いて呉れ。(婆や去る。)姉さん僕はこれでも市へ行くと快活  
な學生になるんだから、安心して下さい、僕は家へ歸ると何となく陰氣になるん  
だ。

おみよ。ほんとうにね。家の事なんか考へずに、どうか丈夫でゐてお呉れ。私はお前  
さん一人が華かな世界に遊んでゐるのを見てゐたい。

三郎。けれども、姉さん、今度私の心にこの森の暗い影が反映り出す時は、怖しい破  
滅の來る時だと思ふ。これだけは幾ら考へまゝとして考へなうことが出來な  
いのです。

おみよ。そんな事を言はずに、雪の來る前にまた來てお呉れ。(三郎黙して立つ。姉も  
立つて、庭口より出て行く弟を送る。やゝあつて老婢は廊下より入る。)

第六節

老婢。三郎さんは？

おみよ。庭の方から行つたよ。夫では未だ歸つて来ないの？

老婢。いえ、旦那は先刻お歸りになりました。途中で薬屋のお翁さんと一緒になられたさうで、納戸の前で鳥の毛を剃いでおいでになります。三郎さんに御馳走が出來ないので大變に残念がつておいでござります。

(二人は室の真中に立つ。)

おみよ。鳥は何んな鳥だい。さつもの野鴨ぢやないの？

老婢。いえ、何だか珍しい鳥だよ。野鴨にしては大き過ぎますし白鳥にしては小さ過ぎるやうでござります。

おみよ。(少し笑ひながら)夫で知らない位ならよつは珍らしい鳥ねー

老婢。薬屋のお翁さんはこれは日本の鳥ではない、多分渡鳥だらう、などと申して學生の方々に笑はれて居りましてござりますよ。

おみよ。何んな色をしてゐるの？ 野鴨とは違ふの？

老婢。大變に煩んだ一本調子の色でござります。お翁さんは南の方にゐた頃、このやうな鳥を食べたことがあるが、それとも大分遠ふから多分アメリカあたりから船についで来たのだらうと申して居ります。

(急に話聲が起る。口笛の音再び聞える。老婢は襖を開いて母屋の方を見る。)

奥様。三郎さんは、もうお立ちになるところでござります。

おみよ。(同じく立ち舉り目を母屋の方へ送り點頭す。青年等の華やかな『さようならー』の聲を淋しく受けながら立つ。)

あの人は茫乎して立つてゐるのね、血の付いたナイフを持つてー

(投げ出すやうに言つて襖を開く)

(山羊の鳴く聲。)  
(馬車の喇叭の音。)

静かに幕

(一九一〇、十二月二十五)

市のマホメット

——(マホメットの生涯の第一印象)——

人物

- マホメット (Mahomet) 市の人、三十四五歳
- カシィシヤフ (Kajjah) 市の人、妻四十歳以上
- アリィ (Ali) 市の人、の従弟、十四歳
- ワラカマ (Waraka) カシィシヤフの叔父、五十歳
- アブ・タレブ (Ab, Taleb) マホメットの叔父、六十歳
- アムウル (Amru) 諷刺詩人、娼婦の子、二十四歳
- ゼイド (Zaid) カルブ族の捕虜、市の人、の忠僕、二十八歳

老癡せる女。侍女A、B、

場所

アラビアの國、メッカ市、一市民の家の出來事

時代

紀元六〇〇年代

マホメット家の一室。アツシリアミグレイキ式を折衷せるメッカ市中流以上の生活に適  
はしい建築。正面は三個の四目格子を以て外界の光と空氣を通じ、此中の格子は上の方  
に押しあげられ、そこから、廣い空地をへだててカアブ(Caaba)の白く塗られた神  
殿が月に照らされ豫言その者のシムホルの如く立つてゐる。室の内には壁に添うて厚く

布につつまれた腰懸、また其兩端には直角に突き出た羊の毛に蓋はれたややひくい腰  
懸。室の中央に、ダマスカス製の濃厚な色の布に蓋はれたテーブル、そして其上にはフイ  
ニシヤ製の飾籠、飾皿等が寂しく置かれて、過去の藝術の『すたれ空氣』を室の中にふり  
撒いてゐる。

銀製の二つの獨燈は、靜かに淺い夜を照してゐる。

左方には食堂で、そこには小人殿のしめやかな祝宴が催されてゐるらしく、人々の話し合  
ふ聲、笑ひ聲、盃の打ち合ふ音など時々洩れて来る。

右手は月に依つて女部屋に通ずる。

外界は夜氣の内に、時々鈴の音が小鼓の振動に混じて聞えて来る。

(左右は舞臺の方から)

第一節

少年アライ、侍女A、B、老癡せる女、カツイツヤブ

アライ。(幕の開かれた瞬間に室の中央に、口の長い酒壺をいだいて、模様のやうに  
立っている。少年は伶俐さうな目、ほつそりした身體、そしていつても新しい世の

中の事實を待設けるといふ気分につつまれてゐなければならぬ。天使ガブリエルの鈴の音を一番先きに受け入れる少年である。)

侍女A、B。(アリーの室を横切るのを知るまでは、四目格子の窓框に手を載せて夜を見てゐる。)

老癡せる女。(メツカの町で最年長の女「豫言」と「奇蹟」に養はれる外、全く飲食を癒して、咒文と呻吟を以て「神の口」を送つてゐる。黒い布を以つて全身を蓋ひつつんで腰懸の上に蹲居んでゐる。)

侍女A。(突然窓を離れて、少年を呼ぶ。)  
アライさま！それはもうお終ひの酒でございませうね。わたくし達はあの酒庫まかぐらの中に二時間も居たので、頭が痛くなりまして。

アライ。アブ・タレン叔父さんは、もう酒は澤山だとお仰有るのだけれども、アムウルさんはアラブの男は酒がなくては生きてゐられなかつて、あの赤い唇を紫にして妙な唄を歌ふんだよ。

侍女B。(進み出て)まあ、いやなアムウルさん。でもあの方の酒を飲むところを見ると、ほんとうに甘さうでござりますわ。

侍女A。あのイシマエルがゼムゼムの泉の水をお飲みなされたのも、ちようどあんなでしたらうよ。

アライ。(立ちながら)そしてね、アムウルさんは僕は豫言者にならなければ、己れのやうな酒飲みの詩人になるんだつて。

侍女。まあ、いやな！ハシエム家の若い方が、あんな女たらしの、皮肉家の、意地わるの、詩人などになつて何うするのですか！

侍女B。アライさん、アムウルさんに、斯う言つてお上げなさいませ、ハシエムの子は泉の邊で水を汲まうとしてゐる女の手を握つたりはしなかつてね。

侍女A。そしてカアバの宮にお参詣りする娘の頭に、鈴を打つたりなんかはなさらないつて、

アライ。僕はそんな事知らないよ。でもあの方の歌ふ唄は何んだか面白さうぢやない

か。遠い國の海を思はせるやうな唄だよ。あれ！アムツルさんだ！

(左方、食堂の方からアムツルの唄が響いて来る。小鼓の音と盞の音に混じて。)

老癡せる女。(突然ぶる／＼と戦慄して室内を見まはし、再び元のままになる。)

ガブリエル……………アラ、アラ、ガブリエル！

侍女A、B。(戦慄する。)

アライ。(大膽に「老癡の女」を熟視して)お婆さんは何か欲しらのぢやないかな。お婆さん／＼！

侍女A。アライさまお止しなさいませ。お婆さんは／＼くちも呼び申しても無厭でござりますよ。まるで石のやうに、ぢつとしてららじやるのですもの。

アライ。でも、今、動いたよ。そして何とか言つた。(酒盞をテーブルの上に置して近寄らうとする。侍女は制す。)

侍女B。お婆さまは、もう二月以上も飲み食ひをなさらないのでござります。

アライ。そして、何故こんな所へ連れて來たの、四目格子から夜露が入つてこんなに

この盞のぬれてゐるのがお前達にはわからないのか？(少年はテーブルの上のフィ

ニシヤの盞に手を觸れる。)

侍女A。でも、お婆さまは先程手真似でここへお連れ申すやうに、私供にお命令けなされたのでござります。

侍女B。いくら私供が、お身體に障ると申しあげてもお聞き入れなさらずに、そして始終口の中で「ガブリエル／＼」とお言ひになるのでござります。

アライ。(黙想しながら)お婆さんは、ハシエム家の駱駝の背に、ガブリエルが宿つてゐるといふ昔の物語を信じてゐるのだよ。アブ・タレブ叔父さんは、今夜の中にカマルの群に加るのだ。

侍 A。ほんに、あの方はお年こそ召してゐらっしゃいますけれども、まるで青年のやうな方でござりますのね。

侍女B。そして今度のカアルワンには何故旦那は御出でならないのでございませう？アライ。何故だか知らないよ。だけれどもマホメット叔父さんは、もう砂漠の同じ色

の上を同じ商ひの品物のやうに駱駝の背に積込まれるのがいやだとお仰有つてた。  
侍女A。まあ、品物のやうにですつて！

アライ。メツナの商人が、メツナを出てメツナに歸り、メツカの商人が、メツカを出てメツカに歸る。こんな生活をいつまでもするのだとマホメット叔父さんが叔母さんに言はれた。

侍女A。まあ！

アライ。するとアムウルさんは、それではお前さんは何故同じ盃で日に四度同じ唇を濕すのかと言つて笑つたよ。

侍女A。同じ盃！

侍女B。同じ唇！

アライ。そして、すぐ、「同じ盃」といふ唄を作つて叔母さんに見せたら、叔母さんは何故だかふるくと慄へてゐた。

侍女A。B、まあ！

(この瞬間に左手の戸を開いて、カツイジャア半身を現はして少年に呼び懸ける、一見少女の如き装束、刺繍せる水色の服を着けてゐる。靴の音少しく鳴る。)

カツイジャア。アライ〜。お前其處にゐるの？ 酒壺をそんな所へ置いて何をしてゐたの？ 早くおいで、早く。

アライ。(大様な態度を以て、カツイジャアを見る。)叔母さん、すぐ参ります。

カツイジャア。(侍女に對ひ)ゼイドはワラカ叔父さんのところへ使に行つた筈だが、未だ歸つて来ないの？

侍女A。まだ歸つて参りません。

カツイジャア。あの人は、使に歩きながら物を考へて歩くからいけななのだよ。羊を數へさしても布の寸法を計らせても、あの人のは一返だつてきつちりと合つた例がないんだもの。(カツイジャアはアライと一緒に左手食堂の方に行く。)

侍女A。ゼイドさんは、ほんとうに何うしたのでせうね？

侍女B。立關に靴の音がするやうです。

(二人は耳をすまして音を求める。)

第二節

ゼイド、ワラカア、老癡せる女、侍女、

ゼイド。(ワラカアを案内して右手から室に入る。つつまじげな奴僕、ユリシイ族よりは幾らか低級の種族、頭に灰色の布を捲き質朴の上着をつけてゐる。)

ワラカア。(武士にして、比較宗教學者、シユニア教及び Sankya-Sitras の研究者。黒き僧服、帯の間に剣を狭み、羊皮紙の經典を持つてゐる。)

ゼイドよ。私達はもすこし、星を見て來ればよかつた。

ゼイド。でも、祝宴の席ではあなたを花嫁のやうに待ちあぐねて居るのでござります。アブ、タレブさんも、このカルワンの旅立の前にあなたがヘルシヤからお歸りになることを七度もカアバの宮にお祈りなされたのでござります。

ワラカア。アブ・タレブは何故そう私に逢ひたがるのだらう。

ゼイド。あの方も大變にお年を召していらつしやいます。

ワラカア。アブ・タレブもマホメットのやうに哲學も宗教も學ばなかつたが、神我と自

我をいつても、頭布の中に貯蓄へてゐる男だ。

三離欲は、あの男の駢駄の鈴の音に潜んでゐた。

ピタゴラス派の青年も、あのアラブには少しも力がなかつたと、シリアの旅から歸つた時、私に言つてた。

(歎息す)

だが、私には哲學が必要だ。私達はもすこし星を見て來ればよかつた。

ゼイドよ。私は哲學を學べば學ぶほど心が空虚になる。

(祝宴の席の方に進まうとする。)

アムウルの唄

ほしやれ、飲みやれ、その盃を、

巫女は、くるりと身をかはし、

とくくと注ぐ不思議な酒を、



## 第二節

ゼイド、ワラカフ、老練せる女、侍女、

ゼイド。(ワラカフを案内して右手から室に入る。つつまじげな奴僕、ユリシイ族よりは幾らか低級の種族、頭に灰色の布を巻き質朴の上着をつけてゐる。)

ワラカフ。(武士にして、比較宗教學者、シニダア教及び Sankya-Sitras の研究者。黒き僧服、帯の間に剣を狭み、羊皮紙の経典を持つてゐる。)

ゼイドよ。私達はもすこし、星を見て來ればよかつた。

ゼイド。でも、祝宴の席ではあなたを花嫁のやうに待ちあぐねて居るのでござります。アブ、タレンさんも、このカルワンの旅立の前にはあなたがヘルシヤからお歸りになることを七度もカアバの宮にお祈りなされたのでござります。

ワラカフ。アブ・タレンは何故そう私に逢ひたがるのだらう?

ゼイド。あの方も大變にお年を召していらつしやいます。

ワラカフ。アブ・タレンもマホメットのやうに哲學も宗教も學ばなかつたが、神我と自

我をいつでも、頭布の中に貯蓄へてゐる男だ。

三離欲は、あの男の蹄駄の鈴の音に潜んでゐた。

ピタゴラス派の青年も、あのアラブには少しも力がなかつたと、シリアの旅から歸つた時、私に言つてた。

(歎息)

だが、私には哲學が必要だ。私達はもすこし星を見て來ればよかつた。

ゼイドよ。私は哲學を學べば學ぶほど心が空虚になる。

(祝宴の席の方に進まうとする。)

アムウルの唄

ほしやれ、飲みやれ、その盃を、

巫女は、くるりと身をかはし、

とくくと注ぐ不思議な酒を、

ひんがしの愚かな博士のその盃に。

(歌は單調な小鼓の音と混じて)

ワラカア。(怒を帯び)誰だ！ 誰だ！ あの聲は、ハシエム家の男共の聲ではない。あれは「地獄」を讚美する歌だ。

侍女A。(恐れながら進み出で)お客様のアムウルさまなのでござります。ワラカア。アムウル！

ゼイド。はい。あの諷刺詩人のアムウルでござります。

ワラカア。(ますます怒つて)うむ、あの娼婦の私生兒だな！ 何うしてあれが今夜の祝宴に来てゐるのだ。あれの母はメツカの町に淫欲の種子を蒔いた。帯の間に劍を挟んだアラブの青年は何れだけガブリエルの聲に聳にされたか知れなう。

侍女B。(好奇心を以て進み)出では、あのアムウルさまは、アラブのフライネス、アラブのアスバシアスなどと人に噂をされたあの女のお子でござりますか？

侍女A。まあ、なんといふ不思議な事ではござりませう！

ワラカア。(不快氣に腰をかけて)そして、あの子の生れた時、メツカの貴族の十幾人といふものがあれの親父おやにされたのだ。けれども、あれの眞實の父はその内の一番年長者のアッスであつたのだ。

ゼイド。イホントだが、あの方を *Abu al Ass* と呼びなれます。

侍女A。でも、あの方の書かれる詩にはただ、*Amru* とばかりしてゐるやうでござります。

侍女B。でも、時々「アッスの子」とも書かれます。

(ワラカアは經典を閉じて小聲に腹む。精神の激動を制しなうと努力するやうに思はれる。)

ゼイド。ワラカアさまには祝宴の席にお着きにならなうのでござります。

侍女A。カツイツヤアさまも、大變にお待兼ねの御容子でござります。

侍女B。鈴を鳴しませうか？

侍女A。アライさんをお呼び申しませうか？

ワラカア。(手を以つて侍女を制し)さう、それには及ばなう。

ゼイド。でも、フン・タレンさまには、あなたの靴の音ばかりに耳を澄しておいでになりませう。

侍女B。ほんに、あの方のも喜びなさるお顔が見たうござります。

侍女A。さあ〜。

侍女B。おらでございませ。

ワラカア。(怒氣を帯びて。)かまはずに置け！ 私は私のブルシヤを奪はねばならぬ。S。一匹の羊の子は二人で配けることが出来ぬ。

(観客の席の方に進み寄りこする)

アムウルの唄

ひんがしの博士の鼻のおかしさよ、  
ほこりをかぐアゼンヌの図書館に、

とろ〜とろねむる額は、

プラトーンもどき、さればと、

とるよ、巫女の盃、若さを返へす

巫女の盃？ 若さを返へす、

とるよ、巫女の盃？

(ワラカアはこの歌をきき、腹懐す。)

ワラカア。私はあの歌がいやなのだ！ いや、あれを歌ふ奴がいやなのだ！

ゼイド。アムウルは、町を歩きながらも、あの唄を歌つて歩いて居ります。するとメ

ツカナ町の娘達はカルワンを郊外に送り出す時のやうに、頭のリンネルを烈しく振

ひながら、あの男の後を踵いて歩いてゐます。

侍女A。あの唄は一體何んの唄でございませう？

ゼイド。私達は子供の頃、あの歌を聞いたことがあるやうに思ひます。大勢の若者が

美しい不思議な衣を着て、隊を組んで棕櫚の木の下を、口を大きく開いて通つて行

きましたけれども、それ以來その男供の事を話すものは一人もなくなりました。

ワラカア。娼婦の子は「悪魔の勝利」を讚美する歌を作るといふことは、不思議ではな

なのだ。ある愚かな博士が哲學を求め他きて、「若さ」を求めたのだ。博士の盃には「若さ」と「淫欲」の藥が盛られた。

ゼイドよ、この經典の中には、惡魔の勝利を得たある大きな都市の滅亡の歴史が書かれてゐる、そして大きな新しい都市が生れて來ると書いてゐる。

(アラカカは經典を開いて、エリセントリックな表情を以て以つて讀む。後代の大學教授もしくは敬虔な牧師がやるやうに。)

すべての舟長、海を航る人々及び舟子と海に由て生業を作すものバビロンの燃る烟を見、はるかに離れ立ちて喊叫びひひけるは、何の邑かこの大なる邑に比ぶべけんや……………

と書いてゐる。ゼイドよ、文字のならぬもの、幸福を味ふがいらぬ。なせつて文字あるものは、凡ての豫言に目を通さねばならぬ。

(ゼイドはアラカカに近寄つて經典の上に團體の目を投げる。侍女等は實際に併ひ立つて靜に話し合ふ。)

また、ここにこんな文字がある。

……………この諸王かれが受る痛苦を畏れ遙かに離れ立つて曰はん、哀さかな哀さかな、大なる邑バビロン、堅固なる邑、爾が受くる審判一時の間に至れり……………

ゼイドよ、文字のならぬものの幸福を味へ！

ゼイド。ですけれども、東方豫言書には大變な虚偽いづちりごころのあるといふ事を人に聞いて居ります。私はカフアの宮にお參詣に來た東の國の巡禮に「救世主」の事を聞きました。

すると其時巡禮の人々は、「未だ一向に左様なものは見たことばなし。」と言つて笑つて居りました。

アラカカ。(首を振つて、ゼイドの言葉を否定する。)(ゼイドよ、お前はどの經典と、

この中に書れてゐる豫言を否定する前に、あの紅海の水を否定しなければならぬ。

(窓より外を指して)お前は、あの星を否定することが出来るか？ 其の事の出來た

時お前は初めてあのツェツェアの古の經典とこの「新しい經典」を否定することが出来るのだ。

ゼイド。してあの豫言に應へる爲めに、一の國土にゐなら、一の種族にゐない世界の

やうに廣い力を持つてゐる「救世主」といふのは、「一體いつ来るのだからませう」  
ワラカア。それは何時来るか私にも解らないのだ。然しこの經典には其救世主の必ら  
ず生れるといふ事を象徴として現はしてゐる。何故なれば、ある賤い生れの義人が  
自ら「救世主」と稱して處刑されたことが記されてゐるからだ。

ゼイド。(ワラカアの顔を熱視して)では、それが真正の「救世主」ではないのでせう  
か?

ワラカア。いや、コリシイ族の駱駝の首の周圍には、いつでもガブリエルの鈴の音  
が宿つてゐることを忘れてはならぬ。そして真正の豫言者は、シムム家の正しい  
血を其血管の中に宿したものの外世界にゐるべき筈がないのだ。

ゼイド。そして、それはあなたのやうな經典の學者でございませうか?

侍女A。そして何んな顔の方でございませう?

侍女B。そして必然ワラカアさまのやうに、お鬚の厚い、鼻の太い方でございませう。

ワラカア。(やや攪亂されて)或は、然うかも知れない。然うでないかも知れない。

老癡せる女。(突然戦慄して、窓の方に頭を曲げて祈る。)

「ガブリエル………ブラ、ブラ、ガブリエル」

(侍女A、B電氣を感じたやうに戦慄す。ワラカアとゼイドは驚いて老癡を視る。)

ワラカア。お婆さんは怖しく慄えてゐるやうだ。冷くはないのか。大變に夜露が下り  
てゐるが。

侍女A。冷くはないと云うてございませう。

ワラカア。この老癡さんは、今ではコリシイ族の誰の顔も覺えては居ないが、一度は  
お前達のやうにわかい時があつたのだ。そしてメヤカの町で一番美しい、一番信神  
深い女であつた。

(此時食堂の方から鈴をひく。侍女A、B戸を開いてその方へ行く。)

第三節

カツイツヤア、アブ・タレン、マホメット、アライ、アムール、及び前節の人々。

カツイツヤアはマホメットと共に老人アブ・タレンの手を握つて壁に入る。アブ・タレンはワラカアを見、烈しいエモウシヨンを以て其方へ進み、手をさつて接唇する。ワラカアも突ひながらアブ・タレンの身を抱きかかへるやうにして其胸の前額に接唇する。

マホメットは丈高く、ややデリケートな肉體を持つてゐる中年の男である。特色として其の美しい目、目の美しい事、前額に神經質を示すやうな腫脹が腫形をなして表はれてゐるといふやうな事で、ただ時々發作的の痙攣に苦しんでゐるやうな特徴が見えぬでもない。他は平凡な然し幽鬱な一個の「駱駝追ひ」に過ぎない。

アムウルはいつでも皮肉な毒の中から小聲に歌つてゐる。

カツイツヤアは客を喜ぶ如き表情を以て少年アライと共に室の中を歩む。

アブ・タレン。ゼイド、私の駱駝はもうラントの中に入れてあるか行つて見て呉れい。

カルワンの晩はよく皮袋を盗まれることがあるものだから。(窓から遠い位置にワカラと對つて腰かける。)

ゼイド。ラントは郊外でござりまするか、カナンの宮の邊でござりまするか。

アブ・タレン。町の門の下だ。あそこへ行つて長老の駱駝とらへば誰でも教へて呉れる。

(ゼイド右の月から去る)

ワラカア。カルワンは今夜何時頃に立つのだから。

アブ・タレン。十時頃には立たうと思つて居る。だが、今度のカルワンは若い者共ばかりなので幾らか遅れるだらうと思ふ。私は、今夜星の出る頃まではワラカアとは逢へまいと思つてゐたのだ。

ワラカア。私もベルシヤからの歸に、どんなに途を急いだか知れない。お互に年をとると氣ばかり焦つて、身體は思ふやうに動かないので困つてしまふ。

(マホメットはカツイツヤアと並んで腰かける。マホメットは幽鬱な表情を以つ老人等の物語に傾聴す。)

アブ・タレン。お前さんは餘り本を讀みすぎるからさけなさいのだ。もすこし世の中にも目を投げなければならぬ。グレイスの事はグレイスの人にまかせて置けばいい。

波羅門の事は波羅門の人に、エルサレムの事はエルサレムの人に。なわ、アムウル。

ワカラア。(アムウルの皮肉な目を避けて)或は然うかも知れない。だが私は一時間でも經典から目を離してゐると心は寒くなる。この胸が空虚になるやうな氣がする。

アムウル。(獨語のやうに)「經典は酒の如し」かなわー

ワラカア。「いや、經典は酒ではない。(挑戦的に)酒は「遊樂」だ。經典を誰が遊樂だと言へるだらう!

アムウル。それでは、頭布のやうなものか、器物のやうなものでせうか?

ワラカア。頭布でも、器物でもなら、「米」だ、「衣」だ、いや、米でもない衣でもない「實在」<sup>じじつざい</sup>「その者」だ。

アムウル。ハ、ハ、ハ。ベルシヤの博士達は、皆なそんな事を信じてゐるのですか?

アブ・タレン。カルワンの餓別<sup>はなはだ</sup>に哲學は少し御馳走<sup>ごちそう</sup>さきるといふものだ。もうそんな話はやとして呉れ、よして呉れ。マホメットよ、羊の乳を持つて来ないか。

マホメット。カジイシヤアア、フリーと一緒<sup>いっしょ</sup>に乳を持つて来て呉れい。乳壺は女供に持たせないやうにするがよい。女供は庫の布に乳を塗りに行くやうなものだ。

(カジイシヤアフリーと右手女部屋の方に入る。)

アブ・タレン。(ワラカアに對ひ)マホメットは今度のカルワンには加はらないことになつた。(少し笑ひながら)あれは、毎年毎年おなし駱駝の背に乗つて、おなし砂の

色を見るのがいやになつたと斯う言ふのだ。するとこのアムウルは「同じ盃」といふ諷刺の詩を作つてカジイシヤアに大變に叱られてゐた。若いアラブの心持は段々私達には解らなくなるやうだ。

ワラカア。私も時々然う思ふことがある。然し私はベルシヤの旅行で考が一變してしまつた。

アブ・タレン。何うして?

ワラカア。勞働をきらひ、「神の日」を淫欲の小手で塗らうとするやうな思想はアラブの青年ばかりぢやない。ベルシヤあたりではもうその思想は勝利を得てゐる。「豫言者」「奇蹟」「哲學」「聖人」かういふ言葉はもう死骸になつてゐる。

アブ・タレン。(嘆息す。)

アムウル。「救世主」の出現には、まだくメツカは有望だといふのでせう!

アブ・タレン。して、お前さんはベルシヤの博士達と何ういふ問答をして来たといふのだ?

ワラカア。私はエルサレムで殺された義人は、果して古い經典の「豫言に應へる爲めの人」であるか何うかといふ事に就いて論じた。

アマウル。あなたはそれを否定したのですか。

ワラカア。無論私は否定した。何故なれば、コリシイ族を外にして、またカアバの守護者たるメツカの町を外にして、正しく「救世主」の出現する訣がないと私は確信してゐるから。

(この時カシイシヤマとマリイは右手の入口から乳甕を運ぶ。カシイシヤマは、金髪より侍女を呼んで器具を持ち運ばせる。この事は談話を障けぬやうに行はれる。)

アン・タレン。ペルシアの博士達は何んなことを言つてゐたのだ。

ワラカア。彼等は、その義人は「救世主」であつて「救世主」であらうといふ不思議な結論を持つて来た。ペルシアの博士達は豊かな言葉を以つて其の結論を飾つてゐた。

(嘆息す。)

ワラカア。私はアラビアの言葉は詩には適するけれども、議論にはあまり適しないといふ事を今度の旅行で初めて発見した。

アン・タレン。私は然うは思はない。私はマホメットの幼い時シリフで逢つたネストリアの僧侶の事を思出す。その人の目は輝いてゐたが、羊のやうに靜かに語つてゐた。そして其言葉は赤子の口から出る言葉の數よりも少かつた。

マホメット。セルジイアスとベヒラとが言ひましたね。アン・タレン叔父さんは能く覚えておいでですね。

アン・タレン。マホメット、私はあの頃からお前に經典を學ばすればよかつたと思ふ。

アラブの青年はカアバの説教だけでは効能がなくなつたやうだ(ワラカアに對ひ、)そしてワラカアよ、その問答の結果は何うなつたのだ?

ワラカア。私はカアバの傳説とコリシイ族の豫言を歴史的に叙述して、その「救世主」はハシエム家の内から現はれるといふ事を主張した。そしてエルサレムの義人はその「救世主」の象徴にすぎないといふ事を承認させ、其代りにこの經典をアラブ語に翻譯する事にした。



アムウル。ワラカアさんは宗教家で、そして外交家だ！（アイロニー帯びて言う。）  
ワラカア。いや、私は今まで自分の力を知らなかつたのだ。私は哲學と宗教に渴いた  
狼であつた。今日から私は最も謙遜な翻譯者になるのだ。

アブ・タレブ。夫もよからう。翻譯者といふ者は昔から有益な仕事をした。（一同に對  
ひ）さあ乳を飲まうよ。

マホメット。私は今夜叔父さんの健康の爲めに、新しい乳を出させた。アイロイよ、盃  
を充して呉れら。

（アイロイは乳甕を以つて一同の盃を充す。侍女は果物を絞せた盃を運ぶ。履かけたまま一同盃をよぐ  
る。）

### 第四節

ゼイド入る。他は前節の人々。

ゼイド。（アブ・タレブに對ひ）城門の下のテントには、番人が駱駝を背にして眠つて  
ゐました。あなたの駱駝の事を聞くと、其男は黙つて、三番目の駱駝を指しました。

アブ・タレブ。男供は皆な私のやうに袂別の席せきに着いてゐるのだらう。そしてカアハ  
の宮の方のテントは見ては來なかつたか？

ゼイド。宮の邊には大勢の青年が、白い着物の娘等と何かしきりに囁ささやいてゐました。

其内にはカルワンの群もゐて、今夜出發する前に祈禱の列に加はらねばならぬと申  
して居りました。

ワラカア。そして私がベルシヤの旅から歸つたといふ事を知つてゐる容子かね？

ゼイド。いかがですか、でもある僧侶があなたの名を呼ぶのを聞きました。そしてこ  
の度の旅行は、あなたに立派な説教の材料を供給したと、さぞ羨うらやましげに噂して居り  
ました。

アブ・タレブ。今夜の祈禱にはワラカアは休んでもいいだらう。私等の立つた後でも説  
教と祈禱の日が澤山あるのだから。

アラカフ。いや私はメツカの青年にペルシヤの物語をしなければならぬ、なせなれば、彼等は旅行先で何んな勝感に逢はんとも限らないから(アライに對ひ)アライはその經典を持つて私に踵いて来て呉れ。

アライ。私はアラカフさんのお供をするのが、暫目です。マホメット叔父さんは私を許して下さいませうか。

マホメット。行つてもいい。

(感興なきまじりに言ふ。アライは煙臺の下に經典を持ち出して頁を繰る。)

カジイヤツフ。でもアライは夜露に當らぬやうに氣をつけなければなりませんよ。去年の秋の熱病を忘れないやうにね。

(アラカフはアライを伴ひ行きかける。)

アムウル。アラカフさん、私も一請に参りませう。カアバの宮の邊の娘達に波羅門の歌を歌つて聞かせなければならぬ。そして地の王に戀をした水精の物語も。

アラカフ。マホメットよ、お前はこのカルワンの群に入らなかつたことを恥ぢなければ

ならない。文字あるものは教典と宮の守護者となり、文字なきものは駱駝を友とせよ。これはアラブの律法なのだ。カジイヤツフよ。お前も恥ぢなければならぬ。

若いアラブの男に駱駝をいとはせるのはアラブの女の誇とは言へないのだ。

アブ・タレブ。アラカフはペルシヤの旅から歸つたら大變に氣むつかしくなつた。若い者には若い者の王國を樂しませる方がいいのだ。マホメットはマホメットの盃を干すのぢや。なあ、アムウル。

アムウル。盃を、盃を は、は、は。

(カジイヤツフは顔を赤くしてアムウルを見る。)

マホメット。(輕い反抗心を以て)私はただメツカの商人だ。文字も哲學も私の頭にはない。然しアラカフ叔父さん、私の庫にはペルシヤの眞珠、エジプトの窓懸、ダマスカスの敷物、すべてカアバの宮にお詣りする諸國の旅人の求むる程のものは何うか斯うか備へて置きます。また二匹の羊を其二倍にする事は知つてゐます。また七尺の布を十四尺の價で賣ることの正しくないことを知つてゐます。

アブ・タレブ。(乳を吸ひながら) 私は、まるで今夜はギムナジウムといふものの中にでもゐるやうだ。

ワラカア。(學者らしき澁面を以て、) 私は文字のない者の幸福が美しい！(アリーの方を見て) 私はもう行かなければならない。

(ワラカアはアブ・タレブに對ひ、軽く辭儀して、大股に室を去る。アリーは小性の如く經典を持つて其後に續く、支那の繪の中に私達はよく見るやうだ。アムウルはマホメットとカジイシヤアを見て笑ひながら侍女等に送られて足早に去る。)

### 第五節

アブ・タレブ、マホメット、カジイシヤア及び老癪せる女。

アブ・タレブ。(長老らしき態度を以つてマホメットに對ひ) マホメットよ、お前はワラカアの言葉に就いて頭を苦しめてはいけぬ。あの男は若い頃から經典に溺れてゐ

た。經典の外の事は何も知らない。(カジイシヤアに對ひ) 私はお前達の若さを尊敬する。私は遠い旅へ出てもお前達のこの座敷の燈明あかりの事を思ふ、そして睦しげな夜の物語が、この國の物語のやうに盡きないことを神に祈らうよ。

マホメット。叔父さん、あなたは一層砂のやうに私達を苦しめて呉れるといふと思ふ。私は、あなたにつれられて同じ泉の水を汲み、同じ皮袋から米を計つたことを思ひ出すとこの胸が跳り上ります。私はこのカルワンには喜んで行きたかつたのです。だが私の身體からだは昔のやうなアラブの身體ではなくなつたのです。

アブ・タレブ。お前はなせそんな心細い事を俄別はなわけにしなければならぬのだ。お前の黒い眼はネストリアの僧侶を驚かしたことをわすれたのか。ネストリア僧侶はお前を抱いて祭壇の前に坐らせ「ブンダ」のやうに禮拜したではないか。そしてお前の駱駝に跨つて私の前を歩む時、私はお前の肩の上に白い小鳩の宿つてゐたのを見はしなかつたか。

マホメット。何うか其様な昔話は止してもらひませう。私はメツカの正直な一人の商

人です。私はワラカア叔父さんのやうに、星の数を数へたり、エルサレムの義人に就いて議論をする事は出来ない。また豫言者サレエが奇蹟を要求められて残して行つたといふ蹄腕が小川の水を飲んで、ベニ・ダムド族に新鮮しいミルクを興へたといふ事が偽か眞實かといふやうな事はもう私には用のないことです。私は明日生れる羊の子と私の店に来る旅人の数を考へなければならぬ。

アブ・タレブ。だが私は一返だつてお前に奇蹟を要求めたことはない。お前はやつぱり店と庫とこの座敷とまたあの女部屋の間を往復して居ればよいのだ。

マホメット。ただ一つ………ただ一つ私にも奇蹟があります。その奇蹟が私の肉體を毎日毎時間毎秒の間に打壊して行きます。

アブ・タレブ。それは一體何ういふ事なのだ？ お前は早く言へ。私はもうテントの中へ入らなければならぬ。

カジイジャア。(心配氣に夫とアブ・タレブを見る。)

マホメット。私は世の中の「あること」が一番の奇蹟だと思ひます。マホメットのここ

にあること、それが怖しい奇蹟ではありませんか？

ワラカア叔父さんは先刻も「實在」といふ外國の言葉を何返も繰り返して仰有つたやうですが、あの人は最も粗末な布を織るやうに、すら／＼とあのやうな怖しい言葉を語りました。

アブ・タレブ。(笑ひながら)ああ私もアゼンスへ行つて来ればよかつた。

マホメット。いえ、決してこれは笑ひ事ではありません。もしガブリエルがハシエムの家に宿るといふ事が眞實ならば、そしてイシマエルがハシエムの祈願を受け納れるといふ事が眞實ならば、この「あること」を教へなければならぬ。(間)エルサレムの義人は神の子であらうと人の子であらうと、この憐れなマホメットには何でもなす。

(マホメットは幽靜な音調を以つて、幻影を追ふ如く語る。)

アブ・タレブ。マホメットよ、もうそれは私の領分ではないのだ。何うか老人を餘り苦しめずに置いて呉れ、そしてお前達の結婚の夜の歌を思ひ出さして呉れ。お前は三十頭の駱駝を殺して其肉を貧民に興へた。カジイジャアの侍女供は小鼓に合はして

アラブの歌を歌つた。  
カジイジャア。其事が却つて今の心を苦しめるばかりでござります。遠い國に旅立ち  
なさる方にこんな事を申し上げるのは誠に不本意ですけど、結婚後私達の室は鐵  
のやうに固く冷くなりました。マホメットはただ「寂しさ」と「沈黙」の商人になりま  
した。

マホメット。(カジイジャアの言葉を聞いて、反動的にやや快活に)だかアブ・タレブ叔  
父さん。どうか、若いアラブのいゝ地なさを笑つてくださらーその白い鬚を、無  
花果の熟する頃に私達はまたこの室で見たいと思ひます。

カジイジャア。そして、旅先で若いアラブに悪まれないやうにしてくださいませ。  
アブ・タレブ。いやく私は年はとつても、アラブ魂はなくしないつもりだ。七の星も  
二十四の星宿もこの目の中にちゃんと宿つてゐる。カルワンの列は糸のやうに私の  
駱駝に睡いて来るわ。(立ち上る。)

マホメット。どうか歸りにメツナに寄られたら、新し酒袋を買つて駱駝の背に積込ん  
で来てもらひませう。その時には私も新しい酒を醸して、其袋を充ませよう。私  
の皮袋はもう古くなりました。

(アブ・タレブ右手に歩む。)  
カジイジャア。そして序でに幼いシエムの軟い皮膚をつつむ美しい布をわすれぬや  
うに願ひます。

(アブ・タレブ微笑しながら歩む。)  
老癡せる女。(突然戰慄して。)

ガブリエル……………アラ、アラ、カブリエル！  
(三人は同時に電氣に感じたやうに立ち止つて女を見る。)

幕

(一九二一、三、一六。)



小 説 五 編

少年とピストル

乳

おそのと貞吉

最初の宿

二人の世界

少年ミピストル

(ある少年の日記から)

一、(三十九年)

十月十五日

頭腦の痛はなくなつた。

醫者は何んでも情を昂らせないやうにせとお母さんに言つたさうだ。

『なるだけ氣を落ちつけて、悲いと思つたり口惜いと思つたりしないやうに』とお母さんは何返もなく繰り返へした。そんな事が僕に解らないと思はれるのが情ない。

日暮に早稲田田圃の畔を傳つて江戸川堤を上流へと心に望んで歩いた。

道に荷車がある。すぐ其處に二階も見える。低い二棟の家、一つは桎梏で、いま一

うはくづれかけた古い百姓家だ。

若い馬子が荷車から離れた馬を引つぱつてむら／＼と煙の立ちのぼる湯殿口へ何か獨言を言ひながら入つて行つた。

僕はお父さんの亡くなられた二年前のある夏を思ひ出した。お父さんはよく僕をつれて斯ういふ静かな田舎を歩いたものだ。

僕は斯うして頭を自分から(自分からではな)破壊して、こんな淋しいところを歩きながらお父さんの顔を思ひ出して居るとはお父さんに何して知れやう！

馬鹿！僕は臺の上から下りて来た若い娘の顔を見た時叫んだ。

「僕は斯ういふ美しい田園の間を歩きながら死んだ人を思ひたくなさ。」

「けれども、あの人がつて、もう僕には死んだ人だ！」

斯ういふ反省は僕の頭を打つた。

僕は石のやうに無感覺になつた。

十月二十一日

此頃は夢を見ぬやうになつた。恐しい夢を見るのがいやさに僕は一週間ばかり晝夜を轉倒して暮した。

人の顔が怖しくなつた。誰でも皆な自分を睨んで居るやうに思はれる。

僕はこれから成る丈け人と交う、そして他人も亦た僕と同じ種族スペインに屬するものだといふ陳い眞理を發見しやう。

中田君はいよいよ社へ移るやうになつた。僕は夕暮から車を引つぱつて竹早町まで行つた。車をひいて今夜はひどい目に會つた。車をひく人には同情の心が起きて来る。

阿保君のスペイン語は中々上手くなつた歸りにまた車をひいて来る。

途中で提灯が消えたので路傍の家の軒燈から火をうつした。

暗い夜！星ばかり空の奥深く幽かにきらめいて居る。

十月三十日。



自分は日光の山柿の小枝を上田の格子にはさんだ時戸がガタ／＼と鳴つたので思はず、手をひいて其處から出た。

暗い夜をまた目的もなく歩いた。其間自分は彼の女の赤い頬を見る事が出来た。

十一月一日。

午前お母さんは、僕の頭の悪くならぬやうにとて〇〇〇社にお詣りに行つた。

お詣りの歸路は、また例のお友達の所で、僕の事を話して泣いて来るだらう。

お母さんなどは泣く爲めに出来て居るやうなものだ。

お母さんが居ない時は實に静かだ。女中は居寝りでもして居るのであらう、臺所の方も音一つしない。

夢のみの吾が嬉しきは暗きより夜に………(此間不明)

畑より丘のくさむら………(不明、和歌の断片らしく思はれる。)

十一月二日。

私は天を仰いで、はねあがつて感謝した。

あゝあの雲！

その前フト歩みを止めて塔を見た。足場丸太が高く組み上げられて尖つた屋根の暗い陰から下りて来た重い闇！

月は塔の屋根にかくれて居るが、其の上を蠟のやうな白い雲がすべつてゆく。

僕には現實といふものはない。いつまでも此死んだ王國の中に居たい。お母さん！といふ聲が塔の中から聞えて来た。

江戸川端を歸る。僕はもう酒に酔つたやうになつて居た。橋のところ立って頭を静めやうと考へた。する内に急に酒の刺撃を得たくなつた、斯うなると矢も楯も要らない。河端をまた歩いた。財布を出して見た。酒場の戸口が少し開いて、例の女が其處にぼんやり立つて居た。……僕は自分の國に来たやうな氣がした。

ツイスキイの餘滴を舌で受けながら其處を出て、四五間來ると四十五六の軍人が自分の前を劍の音とさせて停留場の方へ行つた。其が何んもなく僕を憐むといふ顔付をして居たやうに思はれてならなかつた。

十一月五日。

晩に姉を送つて出た時月が出て眞黒に長く方形に手を擴げた雲の先端が魚の鱗のやうに見える。

『お月さまが出て有難うことね、幸さん。』と姉が言つた。

『然うですね。』と自分は無意識に答へた。

寺の垣が眞黒に茂つて居て、其後の木立の間から月が顔を出して居る。

僕は姉がいゝと言ふのも聞かずに例の電信柱のところまで歩いた。

懐しの電信柱！

僕はよく此電信柱の所で彼の女に逢つたものだ。

『幸さんが腦が悪いのだから、餘り遊びに行つちやいけな。』と伯母さんが言つたさうだ。

『お話ししたりすると腦に障るから、なる丈け途中でお逢ひしても話をしたりしない様は。』とも言つたさうだ。

年とつた女の細心には感心の外はない。

こんな事を考へて僕は道を盗人のやうに往つたり來たりした。

盗人といへば僕は思想の上の盗人でないかとも思ふ。

僕は彼の女と握手をした事があつた………何んでもあれは戦争の終へた年の秋であつたと思ふ。

握手といふ事を大事件のやうに思うのが不思議でならない。電燈の下であの女の顔をそつと見たら眞青であつた、そして唇が震へて居た。

あの時僕は群衆の中へ入つた時。

『もう歸へらうか。』と聞いたら『然うですね、五間位ありませうね。』と答へた。

僕は笑はない事が出来なかつた。  
僕等はある町の凱旋門の下を通つて居た。

WAGA A. KOIWA.

AKAKI HANA

BARANO GOTOSHI

二 (四十年)

BAKAYARO

六月十五日。

妹をつれて彼の女は飄然として吾の前に現れたり。  
吾が戀は幻の如し、吾が戀は熱せざる木の實の如し。  
吾は會すして今に至りぬ。今日圖ずも此巷にして會ふ。

『幸さんね……』と妹は姉に呟きぬ。

僕は此妹の言葉が姉の耳に鼓膜を撃つより数十倍の迅速さを以て同じ其言葉を聴取りたりと思へり。

六月十六日。

關さんが來られた志野坊が可愛くなつて、野田氏に供はれて來た。  
野田は罪を犯して捕はれて行く老人だ。憐れむべき善良な此老人の温厚な顔には恐怖と疑惑の目が細く且つ暗く開いて居た。

六月二十五日。

邂逅！

あゝ何と言はう。私はこの邂逅で、また頭腦を破壊しはしなうかと疑つた。私はもう同じ苦痛を受くるに忍びない。——あゝ然し俗人どもの計畫は如何なる場合でも成功して居る。彼の女はもう他人だ。

妹は自分に戯れた。僕を知つて居るのは此妹ばかりだ。誰か私の前へ来て『お前さんは此の女を知つて居ますか？』と尋ねたとする。其時私は何と答へるだらうか。

『さあ、私は知らん』と速ぐ答へる丈けの勇氣を充分持つて居ると信じて居る。

………  
關さんの言つた言葉が思ひ出される。

母は僕の此頃の生活を非常に心配して居る事丈けは能く解る。母は新聞に出て居る悪少年の仲間に自分の息子の名が出て居やしないかと毎日／＼氣を附けて居ると言つた。

八月十三日。

待つてゐる本は來ないので、頭腦が痛む。

八月廿三日。

周囲の凡人達が皆な自分を凡人化せんとして居る。

たゞ此目敏からざる非凡人は自己の立場を疑ひつゝある間に、足場を段々に狭められて居る事を知らない。

丸善に船の事を書いた本を注文した。

僕は何處かの機械場へ行つて、一日一杯機械の運轉して居るのを見て居たい。

八月二十五日。

深川のセメント会社を見に行つた。暗い倉庫のやうな建物の中を四遍も五遍も通りぬけてある橋の上に自分は立つた。高い目のまはるやうな建物の上に手拭を冠つた四十位の男と十五六の少年が立つて居る。年長つた方は駄として河の方を見て居る。少年はシャツ一枚でキョト／＼して居る、然し決して怖れては居ない。

建物の下を見ると煉瓦の積重ねたところに煙冠りした女の労働者が大勢坐つて何か食つて居る。太い股を露出しにして居るのもある。色々な事を言つては笑ひ戯れて居

初め少年を見た時は、自分も何か働かなければならぬと思つた、けれども其下の女の連中の有様を見て、何とも明瞭言へない濁つた感じを得た。彼等の言つて居る言葉には自分の親しみ易いものがあるやうに思はれた。

二年ばかり前に本條と一緒に房州へ行つた時舟で一緒になつた女も、あゝいふ女であつたつけ。斯う思つて見ると一番下の層に腰かけて大福餅を頬張つて居る若い女があの女とよく似て居るやうにも思はれた。

彼等にもやはりあの女のやうに貞操といふ事も何もないのであらう。そしてあの高いところに上つて居る少年もいつとなく彼等の波の中に揉み入れられてしまふのであらうと思つた。

けれども自分は其を可憐相とも何とも思はなかつた。

九月二十七日

余は日毎失望を繰り返へす。その何處より來るを知らず、されど余が永續するに堪へざる失望なり。

午後書齋より庭を見下す、一老婦ありて玄關に入る。余は注意せずして讀書し居りしに、かの老婦は一向出づる模様なし、下りて茶の間に至り見るに、かの老婦は母と何事か語りながら、さめくくと泣きつゝありき。

餘りの可笑しさに何事ならんと憐れなる此二老婦の傍らに倚りて尋ぬるに、老婦は一錢二錢の小楊枝賣を業とする貧しき子なき落魄者なりき。

老婦は顔を上げて余の顔をつくくくと見て、吾が死せる子を思ひ出せりとて益々泣き出せり、母も亦た泣けり。

彼等は古き芝居に依つて養はれたる日本の女なればなり。

正直に言へば余は泣くべき何事をも有せざるなり、然れども余は彼等の泣く聲を聞きて子供の頭を思ひ出して深い穴の中へ下るが如き重さを感じたり。

四月十三日

去年の記憶がぼつくと浮ぶ。

晩にM子さんを訪ふ。

歸途に色々な感想が浮ぶ。自分は何の爲めに行つたかなをといふ事が色々自分の心を追めつける。僕はそんな可貴には慣れて居る。けれども僕はまだまだ弱。

林檎の白い果實のところを見ずに捨てられた食を残りと思ふ。僕ははやく林檎を食べる事が出来なくて裏口の掃除箱に立つてゐるやうなものだ。

他人も、いつでも此長い瘦せた奴がこゝに——掃除箱に立つてゐるなと思つて居るだらう！ あの女も！

七月廿日

遠くもの暗い茗荷谷の上の山の彼方に、磯打つ波のやうな音をして汽車が行く、其森の上に折々稻妻がして、間もなく雨がはら〜と落ちて来て私の頬に觸れた。

悲哀はもう外部から僕を刺して来る。包んで来る。打つて来る。僕は道を歩いて居てたまらなく悲しくなる事がある。僕にはもう友達もなければ家もない。

乞食には家がないといふ、けれども十銭未満の金をやれば綿の入つた布團に包まれて寝る権利を得る事が出来る。

僕には何んにも権利がない。

七月廿一日

今朝母は僕の顔を見て、昨日は何處へ行つて来たか聞いた。

『何處へ行つたつていふやありませんか？』

と僕は答へた。

『お前は』と母は例の句調で『近頃酒を飲むさうだね……後生だから眞實なら止めて

お呉れ、お父さんの亡くなられたのも酒なんだからね。』と言った。

『僕は酒を好かないつて事をお母さん能く知つてゐるぢやありませんか。』

『そりや私はよく知つて居るけれどもね、誰か此間家へ来た人が「幸さんお酒をあがるんですか？」と聞くからね「いえ」と私が答へたら其人が首を曲げて不思議さうにして居たからね、私はそれで心配して居るんだよ。』

僕は其人つてのは誰ですかと母に問ふと母は何うしても答へなかつた。

僕は然し其人を直覺する事が出来た。

十月廿九日

今日は朝から何か待たれるやうな気分で居た。此気分はお父さんの生きて居た頃にばかりあつたものであつた。

其は僕を詐かなかつた。

お秀さんが来た。お母さんと姉さんと芋を食べた。

僕自身の肖像畫を見せると似ないと言ふ。お母さんは似たと言ふ。姉さんは、さうね頬片の邊が少し似てるわと言ふ。

歸る時、お秀さんが、

『幸さん、今度の天長節にいゝものを持ッて来てあげませうか。』と言ふ。

『おゝ頼む』と僕が答へた。

愛は一つの復活である、然し悲しい復活だ。

自分は凡ての女を愛する力を持つて居るやうにも思はれる。

母と姉とが話をする。

『行くものなら行つてしまふ、何うせ私ほら歸らめてゐる。』と母がさうする。

『私はそれを考へるとさやになつてしまふ。』と姉がこたへる。

死の話だ！

私はこの話を聞いて心が新しく震えた。

人間はこれまで不安を感じて生きやうとする。かうしてまで生を愛するとは何たる不幸な本能であらう！

十月三十一日

ふとお父さんの墓を思ひ出した。常光寺の墓場の西端に地藏様と並んでゐる。叔父さんの墓は日市の某寺、矢張これも端にある。直ぐ下が崖で田が見える死人の数が段々殖えて行く。

十一月十五日

山形君を訪ふ。

氏は例の通り活潑だ。冬の繪は少ないものだと言つてラブランドで死んだ恩人の墓を訪ねて、思ひも設けなかつた雪の名書を得た書家の事などを話して呉れた。ミルクホールで Poe の詩を讀む。

非常に激動したので、直ぐ其處を出て例の酒場の方へ進んだ。

十一月廿日

今日午後手紙を二本受取る。一本は太田君、一本はお幸さんからである。

太田君のには繪葉書が入つて居る。公園がある、郵便局がある、川がある、そして港……僕はこの自然に包まれて居た頃は正直でそして幸福であつた。

お幸さんは餘り神経が鋭すぎる。あゝ僕等の後に生れた大は皆な不幸のやうだ。

十一月二十九日

昨夜大井と横田に逢つた。金を借して呉れと言つた。僕は斷然拒絶した。橋まで行つた時大井は突然僕の腰を打つたのでピストルを見せてやつた。

僕は彼等と同類と思はれるので何れ丈けの損害を受けて居るか知れない。

然し僕は覺悟して居なければならなくなつた。彼等は僕のピストルが他人を打つも



のだと思ひ込んで居るだらう。

十二月三日

Poe の詩も……………

あはれこの時は此處にも抱かれ、

眞面目に色褪めて墓原を過る時

嵐のやうに渦巻いた生涯を

冷たし眼で射返す——吾等。

「寧ろ死を望むこと (Never More) だ」

石に滲む冬の日の涙

君の苦熱に遅れた吾等は

晴れた雪を渡る風の音！

曲花と影幻

少年とスピタル

「スピタルで

此脳髓を買すつて」

と言つた君の最後の詩を

封する事を……………

(一九一〇・一・一廿)

ある冬の夜、芝愛宕下の大井田といふ家へ同じ國から出た友達が五人計り集つた。大井田の妻君は伊勢か名古屋の産で一才小肥こへこのした愛嬌があるといふよりは、男のやうなきはきはした性質なので夫の無愛想で無口な欠點を補つて多くの友達を此家に引き付ける力になつて居る。亭主はつい近くの鐵工場てつこうじょうの技師をして居る三十男で、妻君は五つ下の二十五。財産は無論無い代りに借金もない、何方かといへば幸福な生活であらう。所が此二人の中に一つの財産が出来た。妻君は一週間前に大きな女の子を産んだ大きな女の子、然うだ、随分此れ迄、産れた赤子を見なければも斯んな大きな子は見た事はない。

『産まれたな——産れたな——』と言つて無口の大井田は産褥まじしの周圍をぐる／＼廻つ

て歩いたさうだ。

妻君は出産の苦痛を脱してしまつた時、『でも私余り元氣が、よつて男や思ひましたわ。』という、今迄で人に對つてお世辭を言つた事のない夫は生れて初めて妻君にお世辭を言つた。

『何めに徴兵の苦がなくてさうや……』  
其朝も例の通り平氣で工場へ出勤した。出勤したのは、十年近く小脇に抱えて行く大事なポードンオツオと短衣ちゆうぎのポケットへ入れて来る筈の時計がない。『なに是れは誇張でも何んでもない。』と大井田は友達の一人に話した。然んな筈がないと幾ら考へても判らない。其辯古の越後の某所の設計圖を手固く握つて居た。其日はかりは晝限で工場を退けて家へ歸つて来て見ると、机の上にはちゃんと二品載つかつて其上に襟巻が蓋ひ冠さつて居た。品川の稅務署の役人をして居る男は『然ういふのは眞正ほんじやうの滑稽だ。滑稽を解しない人間はある意味で眞實の滑稽を演ずる事があるものだ。』と言つた。

妻君の友達連が来て居て、女學校で教つた西洋料理を三品計りにビールとおしるこを御馳走した。

夕方から飲み初めて八時頃には男連は皆な酔つてしまつた。隣の六疊の間には妻君の友達連は五六人でカルタを初めた。初めの間は男の方でだらしない歌を歌つたり皿小鉢を叩いたりして騒いで居たが段々其も飽きてしまふと急に隣の女連の聲の方が耳に立つて来た。

何時の間にか唐紙が開いて男の方の八疊と女の方の六疊と一所になつてしまつた。床の間の柱へ軽く肩を寄懸けて細い聲で口早に讀み上げて居た頬邊の赤い女は、急にカルタと一所に顔を疊の上へ押し俯せてしまつた。今迄盛んに取つて居た女連も急に笑ひ出して止してしまふ。中には逃げ出しさうにするものもある。

主人は敷居の所へ肥つた身體をのつそり立て、

『やれ、やれ。皆一所になつてやらう！』とふと、顔を臥せた讀手は赤い顔を舉げてにっこり笑つて、

『太田さん、やつて。』

と障子の所へ立つて室の内を見廻して居る細面の女に聞く。

『だつてもう遅いんですもの。電車は……』

『何に電車？』と主人は笑つて『電車はまだくありませんよ。まだ九時過ぎたばかりだ。さあ皆なおやりなす。』と云ふ。

『ですけども奥さん、お淋しいでせう、皆な此方へばかり来て居て……』と逃げるやうにする。

『何に奥さんなんか何うてもい、』と主人は笑ひながら座つてしまふ。外の男の連中も一方へ陣取つてカルタを揃にかゝつて居る。女連も仕方が無いといふ風に座に就いてカルタの配前を受け取つた。

主人は東北なままりの重い調子で『……ものや思うと人の問うまで』などと讀み上げる。聲に抑揚がないので一向に座がはづまい。二番次げ主人が讀んで、三番目には牛込の方から来た若い男はいやに節をつけて讀むので、誰れか一人女の方で吹き出した

のがある。すると急に皆が笑ひ出して、いくら讀んでも取るものはない。間もなく白のエプロンをかけた若い女が室へ顔を出して、蜜柑と西洋菓子を盛つた盆を持つて来た。

是れは今夜の最後の御馳走であつた。

所るが此利益の分擔は再び男女の間を割いた。といふのは女の内の一人がバナナとカスターラの盆を奪ひ取るやうにして八疊の方へ入つてしまつた。勢ひ女連はバナナとカスターラを追つて八疊へ入るべく全儀なくされた。

女連は暫く笑つて居たが、やがてバナナを食ひ初める。男の方も亦た蜜柑を平げにかゝつた。二個の室は一寸無言になる。けれども温かな無言であつた。

廊下を隔つて妻君の室で湯の沸る音がして、時々細い低い話聲が聞えて来る。つゞいて看護婦の飲み下すやうな笑ひ聲がして障子は幾度か明けたり閉められたりする。男の方では酔が醒めて来たと見えて瀧んだやうな聲で世間話を初めた。

先づ主人は此頃計畫中の朝鮮の事業の事を話し出して、

『何うもあの連中の無學には驚いてしまふよ、外交でも政治でも頭のない外交屋や政治屋の手にある内は駄目だ！』

すると牛込から来た男は、

『だけれども銀治屋には政治は出来まいしね。』と冷かし半分に笑ひながらいふと、

『出来るよ。特に朝鮮のやうな所では。君達は哲學だの文學だのつて騒ぐけれども、

あゝいふ國では何にもならんよ……例へばだ……』

『あゝまた初まつた』と外川といふ牛込の男と對ひ合つて發句をやる男が、蜜柑の皮

へ小指を通しながら、

『大井田は子供を産んでもやつぱり朝鮮行は止めないのかね。』

『止めるものか子供は子供、己れは己れだ。』

『然し此間は大變な騒ぎ方をしたつていふぢやないか。』

皆なが大笑ひした。然し大井田は眞面目に

『然しそんな事は僕の全部ぢやないんだ……』